
残-ZAN-

黒宮 ノブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残 - Z A N -

【Nコード】

N 3 8 3 4 W

【作者名】

黒宮 ノブ

【あらすじ】

「見つけたら絶対ぶん殴ってやる」

吸血鬼を追って消えた姉を探して、彼らの城に居座る事に成功した強気な聖女と、滅びの道を歩む青年吸血鬼達のダークファンタジー。妙な関係に戸惑う中、忍び寄る不穏な影。そこには神など存在しない。携帯サイト「モノクロリアル」にて先行掲載中です。

序章

侵食。

侵食。

音も無く滑り込み、跡形も無く砕け散る。

この身は果てても、奥底に渦巻くは黒い血の契約。

過去は全てモノクロームの世界に消え果てて。

未来は全て暗闇に覆い尽くされる。

いつの日か、あの月の様に再生を。

冷たく凍りついたこの指先に一握りの光を灯して。

それがただの儚き夢であろうとも――。

雨脚は一層強さを増していくようだった。

掘っ立て小屋のようなこのあばら屋では、ところどころの雨漏りも致し方がない。

突然の雨から逃れるために駆け込んだだけだ。
空の気まぐれな天気さえ落ち着いたら、さっさと出て行くだけの
こと。

それなのに、先ほどから窓に打ち付ける雨に混じって稲妻が見え
隠れるようになった。

どうやら今夜は大荒れになりそうだ。

……それにしても一体どうなっているのやら。

ほんの一時前までは雲ひとつなかったはずなのに、今ではこの有
様。

「あーあ、ついてないなあ……日没までには村に帰りたかったのに」

体中の酸素を吐き尽すかのような溜め息とともに肩を落とした。

あまりの晴天に浮かれて、つい遠出をしてしまったことを今さら
悔やんでしまう。

「洗えば元の色に戻るかしら」

ふいに足元に目をやれば、泥まみれになったお気に入りのブーツ
が見えた。

鮮やかな赤い色が、無残にくすんでしまっている。

「どうしよう……」

薄暗くかび臭い小屋の中から、不気味に暗くなり始めた外の景色
を呆然と眺めた。

不規則に響き渡る轟音と光が、不安そうに両手を胸の前で握り締
める“彼女”の横顔を照らし出す。

その胸元で煌めいているはずの十字のクリスタルはすっかり輝きを失っていた。

夜が怖い……。

彼女はふと、心の奥底に底知れぬ恐怖を覚え始めていた。

確か此処はまだ、“彼等”の領域でもあったはずだ。

夜に、“彼等”の領域で“彼等”に出くわしてしまったら……？

俄かに足元が冷やりと冷え始める。

彼女は小さく震えていた。

その時、カタッと何かが動く音が響いた。

彼女は慌てて顔を起こし、辺りを小さく見回す。

目を凝らすと、小屋の奥の方で微かに何かが蠢いているように見えた。

「……ッ!？」

身体の震えが一層強まる中、それはスッと立ち上がり、軽やかなステップでも踏むかのように彼女の前に姿を現した。

「ひっ……ッ!！」

彼女の顔に明らかな恐怖が浮かぶ。

だがしかし……。

「すみません、驚かせてしまいましたね」

そんな彼女の前に歩み出て、ふわっと優雅に微笑むそれは、目も眩むような長身の美青年であった。

少し着崩した白いシャツに、細身の黒のスラックス。

僅かな動作にもサリリと流れるプラチナの髪が、夜のベールに包まれ始めた世界の中にあっても柔らかな輝きを放っている。それはまるで月の様に。

「あの……」

突然の事に息を呑んだままで先を続けられない彼女の言葉を制するよつに、目の前の青年は微笑んだ。そしておもむろにこう告げる。

「ここは“私達”の領域です。出て行かれるのなら、早い方が良いでしょう？」

突如、彼女の顔からは血の気がさつと失せていった。

まさかこの青年は……！

彼女は一步二歩とおぼつかない足取りで後ろへ下がったが、ガクガク震える足はなかなか言うことを聞いてはくれなかった。

その様子を見て、微笑んだままの青年は少し困ったように窓の方へ視線を泳がせた。

それから細くて白い指先でそちらを示す。

「ほら、ご覧なさい。さつそく貴女を求めている来客ですよ？ まったく“ハイブリッド”は良く鼻が利く」

彼女が恐る恐る青年の示した方に目をやると、一人の男が窓に張り付いて彼女を舐め回すように見つめていた。

その片目は異常なほど真っ赤に染まっている。

「きゃッ……！」

その姿に思わず悲鳴を上げて、彼女は固く身を竦めた。

途端、外の男はニヤリと嫌な笑みを浮かべ、握り締めた両の拳を窓ガラスに激しく叩き付け始めた。

中に入ってくるつもりなのだ。
薄くて古いガラスでは、ほんの少しの衝撃でもすぐに破られてしまふ。

彼女は慌てて小屋の奥へと逃げ込んだが、青年はただその様子をやたらと冷めた目で眺めていた。

だが、やがてすぐに大きな破裂音とともにガラスは突き破られ、赤目の男が小屋に侵入してきた。

不気味に笑ったまま舌なめずりをし、そして彼女の逃げ込んだ方に視線を向ける。

そしてあつという間に彼女の目の前まで移動すると、次の瞬間には恐怖でおののく彼女の細い左手首をつかんでいた。

「ひッ!!」

完全に顔色を失った彼女は言葉を紡ぐ事も出来ず、ニヤリと笑う男の顔を戦慄の眼差しで見つめる事しか出来なかった。

もはや身体は制御出来ない程に震えてしまっている。

逃げる事など出来そうにない。

完全に腰が抜けてしまった彼女は、スローモーションの様にへなりとその場へ崩れ落ちた。

もうダメだ……!!

そう思っただけ目を閉じた瞬間、赤目の男が突然悲鳴を上げた。

同時に、彼女はつかまれた左手首に耐え難い痛みを感じて思わず目を見開く。

目の前には赤目の男の足がぶら下がっていた。

「え……?」

恐る恐る視線を上げていくと、先ほどの青年が男の首を片手のみで締め上げていた。

男の太い首に青年の細い指が喰い込んで、次第に男の顔色が青く変色し始める。

自分の腕に走り続ける痛みなど忘れてしまったかのように、彼女はその光景をどこか漠然と見つめていた。

そして、冷たく歪んでもなお美しい青年の表情に、^{かお}目を奪われていた。

「“シード”を前にして随分と不躑躅な」

その口元から零れる優雅な笑みとは裏腹に、青年の白い指は男の首をギリギリと締め付けていく。

呼吸すらままならない赤目の男の足が虚しく空中を蹴った。何度も何度も激しく。

が、やがてしばらくすると全ての力を使い果たしたのか、男の身体は僅かな痙攣のあと弛緩する。

その情景を青年は酷く冷たい瞳で見つめていた。

「もうお休みですか。“ハイブリッド”と言えども脆いものだ」

ククツと笑い、青年は軽々と男の身体を荒れた床へ投げ捨てる。

無造作に横たわった男の顔からは、すでに生を感じることも出来なかった。

そしてそのような光景を目の当たりにした彼女は、男の手形がはつきり残った左手首と、今さっきまでそれをきつく捉えていたはずの男の顔を交互に見つめながら、蒼白の表情でガクガクと震えていた。

「醜い跡が残ってしまいましたね」

片膝を付いて青年は彼女の左手を取ると、冷え切ってしまった彼女の手を包み込むように自らの手を重ねた。

「あの……」

「たとえ昼間は安全な場所でも、夜になればこんなのはザラです。少し無用心過ぎましたね」

「……ごめんなさい……」

「私に謝られても。とにかく一刻も早く此処を出る事です。……送って差し上げましょう」

ほう、と吐息を漏らして、青年は彼女に「立てますか？」と尋ねた。

青年の手を借りて彼女は何度も立ち上がりうと足に力を込めてみたが、先ほどの恐怖がまだ尾を引き、震える足が言うことを聞かなかった。

立てるかと思いきや、すぐにぺたりと尻餅をついてしまう。そんな事を何度か繰り返した後。

「やむを得ません。失礼」

言うや否や、青年は彼女の腰と膝裏にスツと手を伸ばし、ふわりと彼女の身体を持ち上げた。

「あ、あの」

「しっかり掴まっけて下さい。今日は特別な世界を見せてあげましょう」

火が出そうなほど顔を赤らめる彼女をよそに青年はそう言つと、

荒れ果てた暗い廃屋のドアを開け放ち、未だ激しく降り注ぐ雷雨の
中を、彼女を抱いたまま踏み出して行った。

残
- Z A N -

消えた姉（前書き）

第一夜 招待状

消えた姉

いつも思い出すのだ。

この灰色に淀んだ空を見ると……。

けたたましいくらいの雨の音を聴くと……。

「エルフェリス。私、シードヴァンパイアに逢ったの」

限りなく美しく、限りなく誇り高いシードに……。

そう言つて、忽然と消えた姉エリーゼを。

もう何年も前の話だ。

私は確かまだ十歳にも満たなかったかもしれない。

一方の姉エリーゼはあの頃すでに二十歳近かったと思う。

私達姉妹は歳がかなり離れていて、両親のいない私にとって姉は、姉であると同時に母親のような存在でもあった。

その姉が、私を置いて何処かへ消えた。

あの時も分厚い灰色の雲が空を隠して、突き刺さるような大粒の雨が地上のあらゆる音を掻き消していた。

ひどい雨が続いていて、誰も彼もがうんざりしていた中、一日だけすっかりと晴れたあの日。

確かエリーゼは一人、私達の育て親である神父の御使いとして、朝早くから出かけて行ったのだ。

「今日はいいいお天気で嬉しい」

そう言つて。

だが姉は日暮れ時になっても帰っては来なかった。

夜になるとあちらこちらでヴァンパイアが徘徊し始めるというのに、だ。

使いを頼んだ神父も、昼前には終わる用事であるはずなのに何故とうるたえていた。

そんな私達の心を映し出すかのような重い雲がさつと広がり始めたのは、ほぼ日暮れと同時にだったと思う。

そして再び雨音が辺りに鳴り響くまで、そう時間は掛からなかった。

カビたような湿った臭いと、次第に近づいてくる雷鳴に、幼かった私は神父にしがみついたまま震えることしか出来なかった。

こんな暗い暗い雨の中、一体姉エリーゼは何処を彷徨っているのだろうか。

全身ずぶ濡れになった姉が帰ってきたのは、それからかなり経ってから、夜もどっぷりと更けた頃だった。

出掛ける前の、はつらつとした表情とは打って変わって、ひどく複雑な顔をしていたエリーゼは、帰るなりぱったり倒れてしまった。驚いた神父や村人達によってすぐにベッドに運ばれた姉は、ぐったりとして、ひどく青白い顔をしていた。

この雨の中を戻って来たのだから、当然と言えば当然なのだが、それにしても何かが引つ掛かった。

誰かが呼んできた村医者に診てもらったものの、全身の掠り傷と手首の痣以外は何も異常は無いと、そう言われた。

けれど手首の痣は子供心にも底知れぬ畏怖を感じたことを覚えている。

蒼というよりもどす黒く鬱血したその痣は、どう見ても人の手の形をしていたのだ。

その場にいた誰もが戦慄を覚えたと後々言っていた。

あれだけの痣になるとは余程の力で握り締められたのだろうと。よく掠り傷だけで戻って来られたと。

それほど姉の細白い手首に残された痣は尋常ではなかったのだ。

無事に戻ってきた訳ではあるが、誰かに襲われたのならその犯人を特定せねばならない。

そう考えるのはこの世の常だろう。

親である神父を筆頭に、村長や村人、何処からか噂を聞きつけたヴァンパイアハンターまで、毎日毎日誰かしらがエリーゼの元を訪ねた。

だが誰に何を聞かれようと姉は一切口をつぐみ、答えることを頑なに拒んだ。

そしてようやく起き上がれるようになったその数日後、あの言葉だけを残して人知れず姿を消してしまったという訳だ。

あれからもうすでに十年近く。

あの頃のエリーゼと同じくらいの歳になった私がいる。

明るくて村一番の器量良しと謳われた姉には程遠いが、それなりに大人になった私がいる。

神父に倣ってヴァンパイアに対抗できる白魔法も習得した。

れっきとした聖職者となった今、多少の無茶ならば恐れるに足りぬ。

荒野に出て行って、行方知れずの姉を探すことも――。

「また外を見ているのか？」

ふいに背後から声をかけられた。

振り返らずとも声の主は分かっている。

「いつからそこにいたの？ デストロイ」

だからあえてわざわざ視線を動かすこともないだろうと、前を見据えたままそう言ってみせた。

すると短く笑う声と共に気配が近づく。

「やっぱお前タダ者じゃねえな、エル」

私の前に回り込むようにして壁に背を預け、男が笑う。
やはり思った通り、デストロイだ。

「ハンティングに出掛けたんじゃないの？」

「ああ、取り止めだ。三者会議の前でさすがのヴァンプも警戒してるみたいだな。俺達も迂闊に手を出せないって訳さ」

「ふつ。らしくない台詞」

私がそう言うと、デストロイもまた複雑な苦笑いを漏らした。

幼なじみでもあるこの男の事は決して嫌いではないが、ヴァンパイアハンターという職柄のせいがかどこか血生臭い気がして、狩りから戻った後などは特に接触を持ちたくはなかった。

「何人殺したの？」

「さあな。……いちいち覚えてない」

僅かに伏せた目をどこかへ走らせて、口端を片側だけ吊り上げると、デストロイはまるで吐き捨てるかの様にそう言った。

姉と同年代であるこの男はここ数年の間に名うてのハンターとなっていた。

一度狩りへ出掛ければ名のあるヴァンパイアを次々と仕留め、ヴァンパイアから最も恐れられているハンターの一人としてその名が

広まっている。

彼をそこまで有名にさせたのも、おそらくは姉エリーゼの失踪が発端なのだろう。

デストロイはエリーゼに想いを寄せていた。

あの頃、最も姉に近かったのはこの男だ。

エリーゼがヴァンパイアを追って行ったのでは……との話に発展した後、彼はまるで修羅の如く次々とヴァンパイアを殺していった。名高いシードから名も無きハイブリッドまで。

「……」

「外ばっか見てたってエリーゼは帰って来ないぜ？」

黙り込んだ私に声が掛けられる。

私の瞳に映るのは姉が自ら出て行ったであろう教会のドアと、その先にある外界とを繋ぐ長い下り坂。

左右を林で囲まれたその道は、昼は神々しく夜は禍々しい。

そこに嫌でも姉の姿を重ねてしまうのだ。

一人去り行く姉の後姿を。

だが……。

「別に心配してる訳じゃないよ。アンタと違って」

揺らめく木々がざわめく。

また嵐になるのだろうか。

「……薄情なヤツ」

しばらく間を置いて、デストロイが嗤った。

でも私は何も言わずに空を見上げるだけ。

いくらでもそうやって嗤うがいい。

私はエリーゼを心配していない。

彼女に対する心はこの数年ですっかり枯れ果てた。

自ら出て行った姉の為に、一体どれくらいの人が犠牲になったと思っているのだ。

一体どれくらいの人が善意の搜索の果てにヴァンパイアに喰い殺されたと。

「……薄情か……。そうかもね」

自嘲的な笑みを浮かべて呟く。
私の心は枯れ果てた。

「でもね、あたし決めたの」

「……何を？」

「エリーゼを捜しに行くわ」

「はあっ!？」

突然の事に驚きを隠せないのか、デストロイは何度も何度も私に真意を尋ねてきたが、彼には目もくれず、私の視線は再び雨の降り注ぐ外の景色に向いていた。

そう。

エリーゼは必ず捜し出してやる。

何としても必ず。

でもそれは、心配しているからじゃない。

私はただ。

エリーゼの綺麗な顔を、思いつきりぶん殴ってやりたいだけだ。

シードからの招待

二日前の事だった。

月明かりも姿を消した漆黒の新月の晩、夜も深く更けた頃、人目を忍んでひっそりとこの教会を訪れる二つの影があった。

どちらも黒いマントに黒いフードを目深に被り、自らの姿を闇に溶け込ませるようにひっそりと。

「今回も良き結果で終われます事を……」

影はたった一言それだけを告げると、懷から一通の手紙を差し出した。

真つ赤に染められた高級そうな封筒に、黒いインクで流れるように書かれた「Invitation」の文字。

その場を遠くから傍観していた私ですら、それが何なのか一目で分かった。

あれは……。

「招待状か。ついに」

デストロイが腕組みをしてから呟く。

「そう。あれがあれば堂々とシードの居城に乗り込めるってワケ。誰に邪魔される事無くね」

「そんな簡単に行くものか。毎回こつち側の同行者は神父に次ぐ力を持った司祭って決まってるんだよ！ お前みたいなヒヨッコが行けるわけねえだろ」

肩をすぼめておどけて見せたデストロイは、私をバカにするよう

に鼻で笑った。

ああ、癪に障る。

「それにシードの居城はヴァンプ領域のど真ん中だぜ？ 聖職者と言えど喰われるぜ、女は」

ああ、ハンターの癖に無知な男。

「知らないの？ デストロイ。あたしが白魔法使いだって事。それに今回の同行、神父も正式に認めてくれたのよ。誰にも文句は言わせないわ」

白魔法使い。

神聖魔法と言った方が分かりやすいのだろうか。

要するにヴァンパイア達閻の勢力に対して、絶対的な威力を発揮する魔法が存在するのだ。

その魔法を習得した者が白魔法使いを名乗れるのだが、聖職者でない者は習得すら出来ないという非常に貴重な魔法。

また聖職者の中でも実際に習得出来るのはごく一部とされ、白魔法の使い手となった者はヴァンパイアとの抗争地域に多く派遣される。

この村もまたその地域の最前線の一つ。

この地で聖職者を目指す者は、強制的に白魔法の習得を試みなければならなかった。

ただの聖職者など、この地にあつてはそこら辺にいる非力な村人に同じ。

ヴァンパイアの前では、血を通わせた一人の食糧に過ぎない。

少しでも戦力を求めるのは決して不自然な事ではないのだ。

そしてそんな中、私は運良く習得出来ただけ。

すべては神の気まぐれ。

「……なるほどね。シードすら簡単に手を出せない所を利用するってワケか。だがな、エル！ 早まってシードを殺したりしてくれるなよ？ ヤツラは最後の一人まで俺が討ち取る！」

激しく燃えたぎる瞳を夜の外界へと向け、デストロイは吼えた。硬く握り締める拳は誰の為だろう、……なんてわざわざ聞かずとも分かつてはいたが。

私の瞳は冷めた色。
情熱など不要。

「シードもハイブリッドもどうでもいい。死のうが生きようが私には関係ない。でもエリーゼだけは絶対に連れ帰ってみせる」

もちろんそれも生きていたら、の話だが。
姉は今でも何処かで生きている気がする。
ならば連れ帰る。

そして姉の為に死んでいった人達の前で謝らせてやるんだ。

だが同時に、何故かヴァンパイア自体に強く惹かれる自分がいた。未だかつてヴァンパイアと直接的な接触を持ったことが無いからなのだろうか。

それともただの興味本位に過ぎないのだろうか。

よく分からない不思議な感情を処理しきれず、私自身ずっと長い間戸惑っていたのも事実だ。

「シードもハイブリッドも関係ない……か。そうだな、お前はお前のやり方でやるがいいさ。見事エリーゼを連れ帰ったなら後始末は俺が付けてやる」

ボキボキと嫌な音を立てながら拳を鳴らし、デストロイはニヤリと笑った。

やはりこの男もまだエリーゼを諦めてないのだ。
相変わらずの執着の深さに思わず苦笑してしまう。

そこまで誰かを一途に想い続けられるものか。

私には理解できない。

「で？ 三者会議はいつに決まったんだ？」

「次の新月の晩に迎えが来るって言ってたわ」

「慣例だな。もちろんハイブリッドが来るんだろ？」

「当たり前でしょ？ こんな時期にシードが易々と出向いてくるワケが無いわ。誰かさんみたいなハンターだって目を光らせてるでしょうしね」

皮肉をたつぷり込めた台詞と共にデストロイの表情を窺うと、彼もまた意味有り気な色を瞳に浮かべ、こちらを見つめていた。

名高きヴァンパイアハンターの眼をして。

「毎日どこかで誰かが食い殺されてる現実を見れば、俺達ハンターが狩り続けたって文句は言えねえな。……まあ、会議前だし自重はするがな？」

「絶滅寸前のシード相手でも？」

「もちろんだ。それこそ俺達には関係ねえよ。シードがいなくなりや、これ以上人間からヴァンプになるヤツは生まれない。ハイブリッドだってやがては衰退していくだろう。そうすれば、俺達人間は人間として生きていける。何が悪い？」

何が悪い。

そう言われてしまえば、人間である私は何も言えなくなる。

白魔法使いであっても、私とて人間だ。

人間の血を必須とするヴァンパイアにとっては、私もただの獲物。一つ行動を誤れば、明日には物言わぬ骸となっているかもしれない。

冷たい土の上で。

「何が悪い……か」

デストロイに聞こえないように、口の中から声を漏らさない様に、小さく小さく呟いて嗤った。

シードヴァンパイア。

そう。

それは吸血した相手をヴァンパイアに変える特殊能力を持った魔物。

人間と同時に生まれ、人間を喰らい、絶えず人間と対立しながら、それでも生き長らえてきた古代の生き物。

彼らによってその身を変えられたヴァンパイアはハイブリッドと呼ばれ、彼らを蔑む表現として、劣化種などという言葉もしばしば聞かれた。

ハイブリッドヴァンパイアは総じて、人間をヴァンパイアに変える能力を持たないからだ。

シードの絶対的な条件であるその能力を持たない彼らは、どうあがいてもシードにはなれない。

永遠の命と吸血行為、という点だけは共通しているのだが。

「シードがいなくなった後の世界は……どうなるのかしらね？」

「……さあな」

ハイブリッドはこれからいくらかでも数を増やせる。
子孫を残せばいいのだ。

だが一方のシードは両親共にシードでなくてはならない。

例えばどちらかがシードであつても、片親がハイブリッドでは生まれる子はハイブリッドだ。

シードが絶滅への道を歩まねばならないのも、ハンターが存在以前にそこに要因があるのだろう。

ただでさえ、ハンター達の乱獲により数が激減したと言われる上に、最近では女のシードはすでに死に絶えたとの説が有力視されている。

今、ここに生きている全ての者達が、大きな分岐点に立たされているのかもしれない。

生きるか死ぬか、それは神のみぞ知る事なのだろうか。

「後のことは、シードが本当に死滅してから考えればいい。今は…
…シードを殺し尽くす策を考える方が先決だね。あれだけ狩つてもエリーゼを知るシードには出会わなかった。全部狩り切るまで…
俺はエリーゼを諦めないッ！」

「……アンタもしつこいね」

もう本当に苦笑するしかない。

けれど、こんな私よりもデストロイの方がよっぽど人間らしいのかもしれない。

そう思うのだ。

そんな私には目もくれず、デストロイはもたれかかっていた壁から背を浮かせ腕組みを解くと、開かれたドアから一歩踏み出し、飽きもせず雨を降らせ続ける空を仰いだ。

冷たい雨はすぐさまデストロイの身体を濡らし、吸収しきれなくなった水滴が次から次へと衣服から零れ落ちた。

雨に濡れていく。

「とにかく健闘を祈ってるぜ、エルフェリス」

たった一言そう言って私に背を向けたデストロイは、激しい雨の中、地面に溜まった雨水を撥ね上げながら、ゆっくりとふもとの村へと消えて行った。

雨に濡れていく。

雨に濡れていく。

——泣いているんだ、あの男。

この雨のようにずっと。

心の中で激しく泣き続けているんだ。

そう思った。

麗しの案内人

月明かりは時に、迷える者への道標となる。

だが新月である今夜は逆に、果てしない暗闇に吸い込まれてしまいそんな感覚に陥った。

手を伸ばしてもそこにはやわらかな光で輝く月は存在しないのだから。

今日が約束の日。

村中一切の外出を禁じられた中、深淵の闇に紛れてその使いはやって来る。

教会の者も皆、早い時間から神父と私を残してふもとの村へと降りて行った。

三者会議に参加しない者は誰も、使者の姿さえ見る事も叶わない。それすらも盟約違反となるからだ。

だから誰も彼もがそれを恐れて、朝早くから家中の窓を分厚いカーテンで隙間無く覆い、住人は息を潜めて夜が明けるのを待ち続ける。

今、ここには神父と私の二人だけ。

やたらと静まり返った空気が妙に重く押し掛かって少し息苦しい。

「怖くはないか？ エルフェリス」

ふいに神父が声を掛けてきた。

「別に……」

対する私はやや遅れて素っ気無くそう答えた。

その答えを聞くや否や、神父はくすつと笑みを零した。

「そうか……。ここを出たら生きて帰れる保証は無いからね。お前のたつての頼みとは言え、私は今、お前を同行者として選んだ事を深く後悔しているよ」

「ふふ。神父は“娘”には甘いものね」

わざとからかうように私が言うと、神父はバツの悪そうな顔で苦笑した。

「大切に育てた娘だからね。せめてお前にだけは無事でいて欲しいんだよ、エルフェリス」

目尻に刻まれた皺が一層深みを増す。

思えばこの神父、リーゼン・ゲイル司祭もこの数年でだいぶ老けた。

歳はエリーゼよりも少しばかり上で、まだ四十にはなっていないはずなのだが。

しかしそれでもやはり心労が大きかったのか、エリーゼが失踪してからというもの、彼の自慢の肌艶は一層失われてしまった。

気付かぬうちに、髪には白い物が随分と混じり始めている。

ヴァンパイアに対して絶対的な交流力を持つこの神父は、人間とヴァンパイアの狭間でいつも、両者にとって一番良い共存方法を模索し続けてきた。

それ故ヴァンパイア……特にシードからの信頼は、他の司祭に比べて群を抜いて厚い。

「シードはともかく、今のハイブリッドの行いには目に余るものがあるからね。用心するに超したことは無いだろう」

神父の言葉に思わずドキツとした。
ともかくって何だ、ともかくって。

「これからヴァンプの中心に飛び込もうとしてるのに脅さないでよ！」

「おや？ 怖くないんじゃないのか？」

「う……うるさいなあ……！」

痛いところを突かれて思わず声を張り上げたその時、何処からともなく風が舞い込み、室内を照らしていた全ての灯りがふっと消えた。

「!？」

何事かと驚いて、私はとっさに神父の腕にすがり付く。
一瞬で辺りを包み込んだ闇を酷く恐ろしく感じて。

「大丈夫。迎えの使者がいらしたようだよ」

私の肩を優しく摩り、いつもの優しい声で神父が囁く。
すると途端に早鐘のように鳴り続けていた鼓動がゆっくりと落ち着き始めるのだから、不思議だ。

神父の声には天使が宿っているのではないかと本気で思う。

「行くぞ、エル」

私の手をしっかりと握り締めながら、神父は教会のドアをゆつくりと開け放った。

連日降り続いた雨によって作り出された水溜りが時折黒く光を放つ以外、特に何も変わらない風景。
だが一つだけ違う。

「お待ちしておりました」

外にはすでに、黒いフードに黒のマントをまとった人物が二人、じつとこちらを見据えて立っていた。

その後ろには漆黒の馬二頭がひく漆黒の馬車。

一面の黒の中にも繊細で美しい装飾が施され、それは何故か夜の闇の中にあっても一際異彩を放っていた。

二つの影は私達に向かって一礼すると、深く被ったフードに手を掛けて、ゆっくりとそれを取り外した。

「うわ……」

そこにいたのは思わず溜め息が出るような美しい女と男。

両者とも片目が真っ赤に染まっていた。

それは他でもないハイブリッドの証。

夜になるにつれて片目だけが赤く染まる……ハイブリッドの大きな特徴だ。

「リーディアと申します。リーゼン＝ゲイル様、そしてエルフェリス様、私が責任を持って会期中の警護をさせて頂きたく存じます」

そう言うってから再度一礼をすると、ハイブリッドの女リーディア

はすつと身を引き、後方に留めている馬車の扉を開けた。

「どうぞ。足元にお気を付け下さいませ」

そして私達に馬車へ乗るよう促す。

もう一人のハイブリッドの男は御者台に上がると、再びフードを被り直し、黒い手綱を握り締めた。

私と神父は一度だけ顔を見合わせると、互いに大きく頷いて、馬車へと足を踏み入れた。

リーディアは私達が乗り込むのを待つて、自らも車内に入る。

そして内側からしっかりと鍵を掛けた。

一度だけグラッと揺れて、私達を乗せた馬車がゆっくりと動き出す。

「シードの居城まではどれくらいかかるの？」

リーディアが椅子に腰掛けるのを待つて、私は彼女に問いかけた。
いきなり尋ねられた事に対して少々面食らった顔をしていたが、
リーディアはすぐに柔らかに微笑んでみせる。

「夜通し馬を走らせても、さらに一晩はかかってしまいますわね」

「一晩?! 途中で朝になるじゃない!」

「まあ、ほほほ。私達の身を案じて下さるのですね。でも大丈夫。
途中からは日中移動用の暗道がありますの。そこなら私達も足留め
をされる事なく動くことが出来ます。夜明け前には十分辿り着けま
すわ」

リーディアはそう言つと、にっこり微笑んで軽く頭を下げた。

それから車窓へと視線を走らせると、そのままゆっくりと息を吐く。

「この辺りは、随分と景色が良いのですね」

自然と口に出たようなその言葉も表情も、どこか遠くを見るようだった。

何故か彼女の顔に、姉エリーゼが重なる。

「私はもう太陽の美しさを忘れてしまいましたわ……」

赤く染まった瞳と共に馬車も大きく揺れて、私と神父の耳には彼女が囁いたその言葉が良く聞こえなかった。

けれどそれは、彼女がかつて人間であつた事を暗に指し示していたのである。

それからしばらく私は黙ったまま、流れていく景色を眺めていた。暗道に入っても、ところどころ景色を望める箇所があり、私は一人車窓のカーテンから顔を出して、初めて見るヴァンパイアの世界に軽く興奮していた。

ヴァンパイアの領域自体は、あまり私達人間のそれと変わりはない。

住む家も街の構造も。

それがヴァンパイアの街なのだと知らなければ、私はきっと普通に降り立ってしまうだろう。

違いといえば、日の高い時間帯には誰もいないといったくらいだろうか。

それだけでも異様といえば異様なのだが、見ている分には違和感さはほど感じなかった。

だがやはりあちらこちらに転がる死体が目に付いて、何度も何度も目を逸らしたのもまた事実だ。

ヴァンパイアは日の光に弱い。

だから日中は当然表には出て来ない。

その習性を利用して、日中ヴァンパイアの領域に足を踏み入れる人間も少なくはなかった。

日が完全に沈むまでにその領域外に出れば良いのだ。

だが、ほんの僅かな判断ミスで狩られる人間も同じように少なくはない。

道中見かけた骸は恐らく、夜になっても領域を出ることが出来なかった者達の抜け殻なのだろう。

エリーゼもすでにどこかであのような姿になっているかもしれない。

丸腰のままヴァンパイアの中に飛び込んで行った愚かな姉。

生きている確率の方がどう考えても少ない事は分かっている。

だが、もしそれが事実となつて目の前に現れた時、私は同じ様に目を逸らしてしまうのだろうか。

それとも限りなく冷静にそれを見つめるのだろうか。

胸が、苦しい。

「あら？ エルフエリス様、あまり顔色がよろしくないようですが……」

隣で眠る神父を起こさない様に声を潜めて、リーディアが私の顔を覗き込んだ。

今はまだ陽のある時分なのだろうか、彼女の瞳は綺麗なオリブ色に輝いていた。

「……大丈夫。ちょっと考え事をしていただけです」

「そうですか。ですがお疲れでしょうし、城に着きましたら早急にお部屋でお休みになって下さいませね。これから慣れない環境に曝されるのですから体調を崩されません様に……」

「……ありがとう」

私は人間なのに。

そして彼女はハイブリッドなのに。

今一番対立している存在なのに。

リーディアは何故、私の事を心配してくれるのだろう。

エリーゼの事を考えていたからだろうか。

遠い記憶の彼方に押しやったエリーゼの優しさをふと、思い出してしまう。

エリーゼの、優しさを……。

薔薇の居城

禍々しくて陰気、そんな空間を想像していた。
初めは。

だがすぐにそのイメージは崩される。
良い意味で。

馬車を降りてすぐ、目が覚めるほどの花の香りに包まれた。
目の前に広がるのは、夜だというのに真っ白く咲き誇る無数の薔
薇。

シードらの住む居城の庭園には常に一年中、何かしら花が咲いて
いて、その可憐な姿と芳しい香りを楽しむことが出来るのだそうだ。

「レイフィール様が花をお好きなのですわ」

シードの一人の名前を挙げて、リーディアはそう説明してくれた。
夜の闇の中でも美しく目立つ様にと、色素の薄い色を特に好んで
育てているのだと。

古来からヴァンパイアは美しい物好き、と言われてはいたが、血
生臭いはずのヴァンパイアが本当に花を好むなど思いもよらなかつ
た。

やはり何事も一度は自分の目で確かめねばならないのだと痛感す
る。

それから薔薇の庭園をすり抜けて、居城へと案内された私達は、そのまま仮の住まいとなる部屋へと通された。

目を見張るほどの豪華で不思議な趣のある大きな客間は、軽く一家族は暮らしていけるだろう。

何という贅沢、何という美しさ。

初めて知るヴァンパイアの世界に私は驚きと興奮を抑えられずにいた。

「三者会議は三日後の晩となっております。こちら側の都合によりご不便をお掛けしてしまいますが、どうぞご容赦下さい」

部屋や居城の説明を一通り終えて、リーディアはそう締めくくった。

彼女の言う“こちら側の都合”というのは、本来ならば私達を出迎えるべき居城の主達が現在不在である、ということなのだろう。

三者会議を前にして城を空けるなど、随分と余裕があるものだと感心していたが、どうやらそうではなくて、あちらにはあちら側の苦勞と言うものがあるらしい。

神父はその苦勞と言うものを知ってか知らずか、「気にしていない」と苦笑していた。

「シードの方々にお会い出来るのはやはり三日後になりますかな？」

ふいに神父がそう尋ねると、リーディアは当然の如く「ええ」と答えた。

「今、この城にいらっしゃるのはレイフィール様お一人ですの。他の方々は順次お戻りになりますますが、何か急ぎのご用でも？」

「いや、そういう訳ではないのですがね」

誤魔化すように笑って否定した神父に、リーディアは不思議そうな顔をして首を傾げる。

そして私は、普段言葉を濁すような物言いをしない神父ゆえに、先ほどの発言には何か意味があるのだと直感した。

「レイフィール様にならお会い出来ると思いますが、いかがなさいますか？」

怪訝に思っただろう、リーディアも気を使って改めて神父にそう聞き直したが、神父はその申し出に対してゆっくりと首を横に振った。

「今ここでシードと人間が接触ヒューマンを持つては、良く思わない方々もいらつしやるでしょう。在らぬ誤解はこちらとしても不本意。ここはやはり、会議の日まではゆっくりと過ごさせて頂きますよ」

「……左様でございますか。では私はこれで。向かいの部屋に居りますゆえ、何かありましたら何なりとお申し付け下さい」

リーディアはそう言つと私達に向けて恭しく一礼し、私ににっこりと微笑んで、静かに部屋を去つて行った。

それからたつぷり間を置いてから、くつろぎの体勢に入りかけた神父に改めて問う。

「……本当にいいの？」

すると神父は私の顔をじつと見つめた後、いつものように優しい笑顔を見せた。

「いいのだよ。ただ旧知である彼らに挨拶をと思っただけ。そんな

に気にすることじゃない」

「へえ……」

顔はにっこりと笑っていたが、その時何故か、神父は私と目を合わせようとはしなかった。

私の瞳から逃れる様に、私の疑念を逸らそうとする様に。

やはり何かを隠しているのではと、そう思った。

シードヴァンパイアと神父の間に交流がある事はもちろん知っている。

けれどそれとはまた別の何かを、神父は心の内に秘めているのではないかと直感した。

神父は一体何を隠しているのだろう。

だがそれ以後も神父の様子はこれといって変わりはなく、予定通り三日後の晩、私達はとうとう三者会議を迎える事になった。

薔薇の香りに包まれたヴァンパイアの住まう居城で。

三者会議の幕開け（前書き）

第二夜 三つの思惑

三者会議の幕開け

いつの日からかそれは、“三者会議”と呼ばれるようになった。五十年前に一度、人間・シードヴァンパイア・ハイブリッドヴァンパイアの主導者が一同に会し、互いの共存の為に盟約を結ぶのだ。人間側は毎回、私の村の最高司祭とその後継者が出席するのが慣わしとなっていて、今回は私の親代わり・リーゼン＝ゲイル司祭とこの私が出席をする事となった。

その昔、まだ人間とヴァンパイアが狩られる者と狩る者の関係でしかなかった頃。

人里でも次々に襲われ命を落とす人々の行く末を憐んだ数代前の村の神父が、単身シードの居城に乗り込んだ。

死をも恐れぬ彼はたった一人、長い年月を掛けてヴァンパイアとの間に見事信頼関係を築き上げ、ついには共存の為の盟約を取り交わすという偉業を果たした。

その功績を評価されて以降開かれるようになった三者会議だけに、必ず代表者は私達の村の教会から選ばれる事となったのだ。

もちろん盟約が結ばれたからといって、ヴァンパイアに襲われて死ぬ人間、ハイブリッドとなる人間が完全にいなくなったわけではない。

今でも何処かで命を落とす者は後を絶たない。
それでも明らかに減少したのは事実だ。

「あの頃はシードもたくさんいたし、ハイブリッドに対しての影響力も絶対的だったからね」

三者会議のあらましを語る時、神父はいつもそう言っていた。
今ではもう失われつつある、シードの絶対的な統率力。

デストロイらヴァンパイアハンターが数年前から一斉に行った乱獲は、数多くのシードを死に至らしめたと言う。

そしてそれは彼らの権威を著しく失墜させてしまった。

以降、ハイブリッドの中からは少数ではあるが、盟約を無視し、かつてのヴァンパイア栄光時代を取り戻そうとする一派まで生まれた。

盟約で取り決められている吸血禁猟区で人が喰い殺されたり、その報復と言わんばかりに逆にハンター達がヴァンパイアの領域内で狩りを始めたりと、盟約締結で築き上げられた秩序は忘れ去られ、事態は急速に暗転していった。

そんな中開かれる今回の会議。

大荒れになるであろう事は予測済みだ。

けれど私はそんなことよりも早くこの部屋を出てシードに会いたくて仕方がなかった。

その中の誰かが姉の行方を知っているかもしれないのだから。

いつ、どの状況で殺されるか分からないと会議への参加を嫌う聖職者も多い中、自ら志願した私は自分でも驚くほどに落ち着いていた。

「ご準備はよろしいでしょうか？」

素敵な黒と赤のドレスを身に纏ったリーディアが迎えに来て、私の心は先へ先へとやる。

しかし私もまた用意された白のドレスで正装していた為、重くて長い裾が、前へ前へと向く私を後ろへ後ろへと引っ張っているように感じた。

今ならまだ引き返せると。

見えない何かがそう言っていたのかもしれない。

「ここから先、私は一人のハイブリッドとして会議に臨まねばなりません。しかしお二方の事は全力で守りますゆえ、ご安心下さい」

そう言つて微笑んだリーディアは、私と神父を先導しながら静かに大きな扉に手を掛けた。

ギイ……という軋んだ音と共に開かれた扉の向こうには、限りなく明るくて限りなく優美な空間が広がっていた。

その部屋全体が蝋燭のやわらかな光に包まれて、神々しいまでの暖かさを感じる。

我々人間が日々暮らすあの教会ですら、ここまでの温もりは再現できないだろう。

ヴァンパイアの住まう居城であるはずなのに、ここには妙な居心地の良さがあつた。

「お二方のお席はあちらとなります」

案内された先は細長いテーブルの上座。

テーブルの上には無数の燭台と庭園に咲いていた白い薔薇。

ゴールドのレースで縁取りされた深紅のテーブルクロスに、薔薇の白さが良く映える。

促されるままに装飾豊かな椅子に腰掛けて、改めて室内を見回した私は思わず感嘆の溜め息を吐いた。

見上げた天井一面が一枚の絵画となっていたのだ。

その絵も限りなく優雅で優美。

幼い頃、神父に連れられて訪れたどこかの王宮も芸術高い内装で大変な評判だったが、それすらも霞んでしまうほどに素晴らしかった。

「びつくりしただろう？ エルフエリス」

だから神父が楽しそうな顔をしてこちらを見ていたことにさえ気付かなかった。

感動だ。

驚きを通り越して感動。

この瞳から脳へと伝わる伝達器官がおかしくなってしまったのではないかと疑いたくなるほどに。

「私も初めてここへ来た時はそうだった。そうやって言葉にならない驚きに戸惑ったものだ」

懐かしそうに目を細めながら、ぐるりと辺りを見回して神父がそう言う。

彼の言う通り、今の気持ちをつまく言葉に出来ない私はただ、黙って頷く事しか出来なかった。

——シードヴァンパイア。

闇に属していながら、これほどまでに美しい世界を造り上げる生き物。

神や太陽にその存在を否定されてもなお、漆黒の闇の中、華麗な世界を追求する彼らとは一体どんな人達なのだろう。

私の彼らに対する期待は否が応にも膨らむばかりだ。

——止めて。

誰か止めて。

闇に惹き込まれてしまう。

複雑に絡み合う感情が、私の中で暴れだして止まらなかった。

しばらくすると、物々しい足音と共にこの広間の扉を開ける者がいた。

透ける様な白肌に青い瞳、片目は真つ赤に染まっている。

人形のような美しい顔を不機嫌そうに歪めたその男は、一通りその場にいた者を見回すと、恐らくは彼の為に用意されたのであろう端の席に腰を下ろした。

そして大きな溜め息の後、その目を閉じる。

「ヘヴンリーだ。ヤツが急進派を取り仕切っているハイブリッドだ」

神父がそつと耳打ちしてくる。

ヘヴンリー？

そう言えば何度かその名は聞いたことがある。

かなり古くから生きているハイブリッドの一人で、確か片親は歴史に名を残すようなシードだったはずだ。

並み居るシードを凌駕するほどの抜群の人望と順応力で、常に時代の最先端を生き抜いてきたと言われる男。

そんな男がよりにもよって過激派を取り仕切っているのでは、さぞやシードらも手を焼いているのだろう。

興味深く見つめる私の視線に気が付いたのか、ヘヴンリーはゆっくり目を開けると、こちらを向いてニヤリと笑った。

そして再び目を閉じる。

溢れんばかりの余裕を見せ付けられたような気がした。

なるほど。

ヘヴンリーというハイブリッドは、そんじょそこらのハイブリッドとは一つも二つも違うようだ。

長き時代を生きてきただけあって、すでにハイブリッドという枠を超えた存在になりつつあるのかもしれない。

だが、あの瞳は脅威だ。

私の勘が咄嗟にそう叫んでいた。

一度解き放たれたカリスマは、次から次へと人を呼ぶ。
人を惹き付ける。

だが、あの瞳は……。

その時再び辺りに足音が響き渡った。

今度はどうやら複数のような。

ヘヴンリーもリーディアも改めて姿勢を正したところを見ると、
ようやくお出ましになるらしい。

待ちに待ったシードヴァンパイア達が。

重苦しく軋んだ音を伴って開いた扉から現れたのは、黒い装束に
身を包んだ三人の青年だった。

三人のシード

時が止まるようだ。

という表現を、今使わずしていつ使うのだろう。

私は今、そんな心境にあった。

呼吸を忘れた身体。

苦しいはずなのに平気だ。

酸素を失っても、きっと気付かずに生き続けるのだろう。

そんな衝撃。

「エル……エルフェリス!!」

名前を呼ばれてハッと我に返った。

その途端に、モノクロームで覆われていた視界に色が戻る。

深紅のクロスに白い薔薇。

そして目の前に並んで私を見ている六つの瞳。

濁りのない澄んだ三つの色がじつとこちらを見つめていた。

「ご挨拶を、エル」

神父にそう促されて、会議がすでに始まっていたのだと悟る。

私は慌てて立ち上がり挨拶をしたが、少しの動揺が言葉として出てしまった為に、向かって右側に座っていたシードの一人に笑われてしまった。

「いいねえ、今回は初っ端から重くなくって。随分面白い娘連れて来たじゃん、ゲイル司祭」

親しげに神父に話しかけたそのシードは、一般的に線が細いと言われるヴァンパイアの中では、珍しくしっかりとした体つきをしていた。

たてがみの様な髪型や服装も、どちらかと言えば型破りなワイルド系とでも言えはいいのだろうか。

血の通わない魔性の生き物ながら、その男からは人間さえも超越するほどの生命力を感じた。

「白ッ」

「あぁっ?!」

ついうっかりと声に出してしまうほどの肌の白さ。

雪の様な、白磁の様な、なんて比喩ひゆも必要のないほどの白肌。

そう、敢えて例えるならば……目の前の白い薔薇、といったところか。

言われた本人としては面白くなさそうだったが、深いセピアゴールの瞳がやけに印象強く感じた。

「くす。言われちゃったね、デューン」

かたやこちらは向かって左側、まだあどけなさの残る顔で少年が

くすくすと笑った。

見た感じ、私と同じくらいの年頃だろうか。

それでも果たして本当の年齢はどれほどのものなのか見当も付かないが。

角度によって微妙に色を変えるアイスブルーの瞳がキラキラ綺麗でしばし時を忘れた。

「僕はレイフィール。そしてアイツはデューンヴァイス。失礼なのは生まれつきだから、あんま気にしないで」

レイフィールと名乗ったその少年は、綺麗な瞳を悪戯っぽく細めてにっこりと微笑んだ。

何気に毒舌だが……可愛い。

ニコニコでキラキラ。

やたらと生き生きとしていて、衣装こそヴァンパイアのそれだったが、こちらはあまりヴァンパイアだという印象を受けない。

デューンヴァイスと呼ばれた色白男も、少年の挑発に烈火の如く怒り狂っていて、それはそれで人間臭かったが。

なんだかここへ来てからずっと調子を狂わされっ放しの気がして、どうも変だ。

けれど真ん中に座った男……この男だけは他のヴァンパイアとは違うと瞬時に悟った。

真っ直ぐ相手を射抜くようなダークアメジストの瞳は、気を抜けば一瞬にして吸い込まれてしまいそうな錯覚に陥る。

三人のシードの中で最も目を惹いたのもこの男だ。

その目に抵抗しようとすればするほど、見えない何かに心臓を押し潰されそうになって苦しくなる。

冷たい冷たい氷の様な瞳に。

その男はじつと私を見つめていたが、一度ゆっくりと瞬きをする
と、この場に集った一同を見回して、三者会議の始まりを高らかに
宣言した。

「私はロイズハルト。リーゼン＝ゲイル司祭、そしてエルフェリス。
遠いところをわざわざご足労いただき申し訳なく」

若々しくも威厳のある声が広間に響き渡り、私の心は何故か異常
なほどざわついた。

ダークアメジストの瞳。
白い薔薇。

麻薬のような甘い香りに気が遠くなりそうだった。

共存の盟約

一見聞こえは良いが、共存なんて言葉は、裏を返せば互いに牽制する為の便利な表現に過ぎない。

この会議に於いては特に。

元々敵対していた者達が己の身を守る為に結んだ盟約なのだから、当たり前と言えば当たり前なのだ。

ヴァンパイアの牙に怯えていた人間、ハンターの影に怯えていたヴァンパイア。

互いが互いに安息の地を手に入れることが出来たのが、この盟約の最大の利点であると私は思っている。

しかし何かの歯車が何処かで少しずつ歪みを見せ始めた今、盟約自体を疑問視する者達も現れ出した。

ここで再び確かなる取り決めが成されればまた、これまでの秩序も取り戻されよう。

先ほどから私は、黙って会議の行方を見守っていた。

単なる同行者でしかない私には、発言権は無に等しい。

これまでの会議も平等の名のもとに行われてきたはずだが、それはあくまでも見掛けだけの平等なのだと、この場に臨んでみて初めてそれを実感した。

二つのヴァンパイア勢力に、一つの人間勢力。

数で言っても、明らかに私達人間側が不利な様に仕組まれている。シードの力が絶大だった時代に於いては、さらに人間側はこの会議に苦戦を強いられたであろう。

そんな気がした。

だが完全なる傍観者に徹してしまえば、色々な思惑が案外良く見えたりするものだ。

今回の鍵は特に、ヘヴンリーと言うハイブリッドが握っているように思えた。

この男の意見によつては長年培われてきた盟約も容易に破綻しかない、そんな状況。

例えば彼本人も、案外それを見越していたのだろうか。

こともあるうにヘヴンリーは、私達人間側に吸血地域の拡大を打診してきたのだ。

「バカな！ これ以上広げられては人間の住まう土地すら奪ってしまいます！！」

その声にその場にいた誰もが言葉を飲んだ。

ヘヴンリーの提案に真っ先に批判の意を示したのは、人間である私でも神父でもなく、ハイブリッドのリーディアだったのだ。

「私達は前々回も同じ要求をしていますのに、これ以上はさすがにヴァンパイアとも言えども私は賛成しかねます」

「そうですね……。以前我々は譲歩に譲歩を重ねてあなた方の条件を飲みました。現状としても、これ以上範囲を広げる事は不可能だ」

リーディアの後押しを借りて、神父もすぐさま反論の意を唱える。十数年前、私の物心が付くか付かないか、そんな頃に開催された三者会議も荒れに荒れた会議であつたと言われている。

あの頃はシードもまだ数多く健在で、どちらかと言えばヴァンパイア優勢の世の中にあった当時は、会議に出てくるシードもなかなか話を聞いてくれる様な人物ではなかったと、先代の神父が嘆いていた姿を今でもよく覚えている。

そんなヴァンパイアに圧しに圧されて、彼らの領土拡大を承認せざるを得なかった前々回の三者会議。

くしくもその時広げられた領内でエリーゼは恐らくシードと出会って、そして消えた……。

これも何かの因果なのだろうか。

私を惑わすように、蠟燭の炎が揺らめく。

「エルフェリスとやら。アンタはどう思う？」

突然話を振られてハッと顔を上げると、頬杖を付いたロイズハルトと目が合った。

「え……あの……」

「聴いていなかったのか。ヘヴンリーは我々の領土拡大を提示しているが、アンタはどう考えるか、と聞いているんだ」

そう言っただけでニヤリと笑う。

その顔をどこか呆然と眺めながら、どうしてここで私の意見が必要なのだろうと不思議に思った。

彼はヴァンパイア。

領土の拡大は彼にとっても利点しかないはず。

手放しに賛成するのが当たり前だと思うのは、私一人ではないだろう。

それに対して私は人間だ。

聖職者だ。

普通に考えても反対意見しか出ないのは向こうとしても予測済み

だろうに、何故ここで私に意見を求めるのだろう。

「発言許すつてさ。何でもいいから言ってみなよ」

レイフィールもニコニコ微笑みながら私に意見を催促する。
何なのこの空気は。

予想外の展開に、私は若干戸惑いながら目を泳がせる。

「エルフェリス様。遠慮はいりませんわ！」

リーディアまで。

私はただの同行者なのに。

私はただのオマケなのに。

私の発言に効力は無いのを分かって、みんなでからかっているの
だろうか。

「エルフェリス。意見を」

絶対的な束縛の目で、ロイズハルトが私を射抜く。
その瞬間、私の中で何かの箍たがが外れた気がした。

——私の発言に効力は無いのなら……。

「私達人間にことごとく死ねと言うのなら、反対はしない」

ごくりと唾を飲み込んでから、私はなるべく低い声を保ったまま
そう呟いた。

その言葉と同時に、ロイズハルトの瞳がキラリと光って、それか
ら楽しそうに細められる。

レイフィールもデューンヴァイスも何故か一様に、私の発言に満

足したように頷いた。

「人間がいなくなって困るのはアンタ達ヴァンパイアの方でしょ？
一緒に心中したいなら幾らでもどうぞ」

私はお断りだけど。

そんな風に思っていると、シードの三人が一斉に笑い出した。

「お前マジ面白いな、サイコー！」

「ホントホント！ ロイズ相手にこんな物言いするヤツ久しぶりだね！」

手を叩いて喜ぶデューンヴァイスに対して、レイフィールも大口を開けて賛同する。

そしてロイズハルト。

さっきまで冷たく鋭い顔をしていたのに、目の前で笑う彼はまるで美しい絵画に描かれている天使のようだった。

なんて表情かおをするのだろう。

私は一瞬で目を奪われてしまった。

その後しばらくシードの三人は笑いっぱなしで、リーディアもどうやら笑いを堪えている様子だった。

神父に至っては、随分と複雑な表情で私に笑いかけている。

……怖い。

そしてヘヴンリーは一人、不機嫌そうな顔をさらに深めていった。

「さて、エルフェリスはそういう意見のようだが、司祭も同じでよろしいのか？」

未だ笑いを引きずったままのロイズハルトが、神父にそう尋ねる。

すると神父もにつこり笑って頷いた。

「概ねはね。ただちょっと言葉が悪かったですね」

「——いッ……ッ!!」

突如、ヴァンパイア達には見えない箇所を思いつきり抓られて、私は声にならない悲鳴を上げた。

涙目で神父に非難の眼差しを向けてはみたが、「どうした?」とばかりの笑顔が向けられる。

この笑顔は偽りだ。

悪魔の笑顔だ、神様!

私と神父のやり取りに、シードらはまた笑い出したし。

ピリピリと張り詰め通しかった場の空気はすっかり打ち壊されてしまったようだ。

「どうすんだ? ヘヴンリー。人間側はそう言ってるぜ?」

目尻に溜まった涙を指で拭いながら、デューンヴァイスがニヤリと笑う。

「僕も別に今のままでいいんだけど? 別に誰かさんみたいに飢えてるわけじゃないしー」

小悪魔のように微笑むレイフィール。

そして最後にロイズハルトによってトドメが刺されるのは想像済み。

「分が悪いな、ヘヴンリー。今回は見送ってはもらえないか?」

圧倒的な圧力を感じるその瞳に、さすがのヘヴンリーも唇を噛み

締め、ただ頷くしかなかったようだ。

シードを超えるには、まだまだ彼では役不足。

シードらのヘヴンリーに対する視線からは、そんな雰囲気すら漂っていた。

「……分かりました」

しばらくの沈黙の後、ヘヴンリーは突然立ち上がって面倒くさそうにそう言った。

そして会議中であるにもかかわらず広間の扉に向かって歩き出し、躊躇うことなく大きな扉を押し開ける。

「盟約と我らの発展を祈って」

去り際、僅かに振り返ったヘヴンリーはハッキリとした声でそう言くと、さっさと広間を後にした。

彼の足音が聞こえなくなるまで誰一人、その口を開こうとする者はいなかった。

不敵に笑う者、何かを思案する者、目を伏せて祈りを捧げる者。

様々な思いが交錯する中を、誰かの吐いた溜め息がひどく響いて消えて行った。

ヘヴンリーがあっさり引き下がった事で、その後の三者会議は特に何事も無くスムーズに終結することとなった。

今回は内容に大きな変更も無く、ただただハイブリッドやハンターによる盟約違反を減少させる事を再確認しての閉幕となり、私も神父も肩の荷が幾分軽くなったような気がした。

何故シードやリーディアが私達人間の擁護に回ったのかは解らなかったが、こちら側に優勢に終わったのだからあまり気にすることではないだろうと、久しぶりの酒を味わいながら神父は胸を撫で下

ろしていた。

確かにそうだが、そこにはヴァンパイアなりの思惑があったのだらうと推測している。

シードヴァンパイアと、同じハイブリッドなのに意見を違えるリ―ディアとヘヴンリー。

私が片足を突っ込んだ世界はまだまだ未知だらけ。
だが、私にとってはこれからが勝負だ。

その先が漆黒の闇の世界だとしても。

夜明け前

明けない夜は無いと、誰かが言っていた。

どんなに追い詰められようが、どんなにどん底に叩き落されようが、必ずどこかに打開策はあるものだ。

使い古されたその文句に、一体どれだけの人が助けられたのかは知らないが、私にはあまり意味の無い言葉のような気がした。

私は自らその“夜”に飛び込もうとしているのだから。

「いいじゃん」

「ダメだ」

「なんで？ いいじゃん」

「だからダメだ」

「いいじゃん」

「ダメだ」

さつきからずっとこの繰り返し。

最初は他人事のように楽しんでいたが、何度も繰り返されるものだからさすがに飽きてきて、私は人知れず欠伸を繰り返した。

それでもまだやり取りは続く。

「“ドール”は良くてヒューマンはダメなのかよ」

「そういう問題じゃねえだろ」

はあ、と溜め息を吐いたロイズハルトの身体が深く背もたれに沈んだ。

ここは居城の上層部にあるロイズハルトの私室。

ロイズハルトとデューンヴァイスと私。

三人で丸いテーブルを囲んで腰掛けていた。

私の“ワガママ”をロイズハルトに承認してもらう為に。

三者会議が終結してからすでに数日が経過していたが、私と神父は未だシードの居城に居座り続けていた。

名目としては盟約締結後、ヴァンパイアが本当にその決まりを遂行してくれるのかどうか監視する為、としているが実際は、「エリ―ゼを捜したいから私をここに置いてくれるまで帰らない」と言つて、私がごねているから。

私をこの居城に連れて来る時には渋ったくせに、居城に留まりたいと打ち明けた時はあっさりとして承した神父には驚いたが、どちらにせよ神父の了解が出たのだから、彼の気が変わらない内に城の主達を説得しなければならぬと私は奔走した。

となればまずはハードルの低そうなところから攻めるのが得策。という事で真つ先にデューンヴァイスに白羽の矢を立てた。

彼ならきつと、面白がつて賛成してくれるだろうと思つたらだ。

だが広い城内で何処にあるかも分からない彼らの部屋を探すのは、非常に骨の折れる作業だった。

三者会議の後、唯一の頼みの綱だったリーディアはシードの使いとしてどこかへ出掛けてしまつし、神父も彼らの私室までは知らないと言つし。

来る日も来る日も迷路のような城内を歩き回っても、何故か上層

部への階段だけは発見出来なかった。

だが見つかる時なんて脱力するほどあっさり見つかるものだ。

一体この居城はどんな構造になっているのだろうと再確認する為に庭園に出たところで、窓辺からこちらに向かって手を振るデューンヴァイスを見つけたのだ。

散々捜し回っていた相手が、私に向かって能天気な手を振っている。

この機会を逃してはならないと、慌てて再び城内へ舞い戻って、全速力で彼の元まで駆けて行った私は、一言目に驚いた。

「よー、エル。お前この城で暮らさねえ？」

息も整わない内に、なんとデューンヴァイスの方から居城に留まらないかとの打診を受けたのだ。

ハードル云々以前の問題だったのだと逆に呆氣にとられもした。

だが、これはチャンスともちろん快諾したから、私は今この部屋にいる。

が、部屋の主であるロイズハルトは頑なに拒否するだけで、なかなか承諾させるには時間が掛かりそうだった。

理由は無く、ただ「ダメだ」の一点張り。

シードの城に人間がいたら、何か不味い事でもあるのかと疑いたくなるほどだ。

「共存の盟約を実行するなら、やっぱりお互いに分かり合わないとな、エルフェリス」

ウィンクで目配せするデューンヴァイスに合わせて、私は壊れた人形のように何度も何度も頷いた。

「そうそう！ それにドールと言えども人間だし！ 一度ドールの実態を調査してみたかったというか……。ね！！」
「そうそうそうそう！」

それから心にも無い言葉をとりあえず並べて、デューンヴァイスに頷かせる。

この作戦を繰り返せば、いかにロイズハルトといえどもいずれは折れるだろうと踏んでいた。

が。

こちらのハードルは高すぎた。

しばらく粘ってはみたものの、長い根気勝負で完全にロイズハルトに完敗した私とデューンヴァイスは、リベンジの策を練りつつ城内の回廊を当てもなく歩いていった。

ヴァンパイアが活動すべき夜であるというのにやたらと静かで、並んで歩く私達の足音だけが鮮明に耳に響く。

デューンヴァイスはもうずっと押し黙ったまま、何か自分の考えに浸り込んでいるようだった。

細く白い指先を唇に当て、時折目線はどこかを彷徨っている。

私の存在をすっかり忘れてしまっているのだろうか。

それならそれで一向に構わなかったのだが、私はどうしても彼に聞いておきたい事があつた事を思い出す。

「ねえ、どうして私をここに置きたいの？」

ふいに立ち止まってそう声をかけた。

するとデューンヴァイスも少し進んだところで足を止め、ゆっくりとこちらを振り返る。

そこにいつもの彼の軽さは無い。

「——お前に興味があるから」

そして躊躇うことなくそう言っただけだ。

私に、興味がある……？

「どういう意味？」

「そのまんま」

少年のように悪戯っぽく笑いながら、回廊のバルコニーへと出るデューンヴァイス。

そしてその柵にもたれながら、僅かに欠け始めた月を見上げた。

「お前は？ お前は何でここに残ろうとする？ シードに、……ヴァンプに囲まれるって事がどういう事か、お前も司祭も分かっているだろう？」

月に照らされて一層輝くセピアゴールドの瞳が私に向けられる。その顔は先ほどまでの彼のそれとは違って、闇に生きるヴァンパイアの顔をしていた。

夜空に浮き上がるような白い肌に、口元から覗く白い牙。

冷たいものが私の背筋を伝って溶けていった。

「……人を捜しているの」

「人？」

「そう。何年も前にヴァンプに魅せられて消えた知り合いをね。……生きているのか死んでいるのか、それだけでもいいから知りたいの」

「ふーん」

私の話をじつと聞いていたデューンヴァイスであったが、彼もまた私の期待を潰す様な非情な一言を投げかけてくれる。

「ヴァンプといってもいっぱいいるからなあ……。不可能に近いぜ？ わざわざ危険を冒してまですることなのか？」

「……うん」

「どうして？」

目の前で首を傾げるヴァンパイアは、私の身を案じてくれているのだろうか。

おかしい話だ。

私に残れと誘っておきながら矛盾しているようにも思ったが、垣間見えたデューンヴァイスの優しさにふと笑みが零れる。

不可能に近いのは初めから百も承知だ。

だが全く手掛かりが無いわけではない。

エリーゼが追って行ったのは、ただのヴァンパイアではない。

「シードに会ったって言うてたの」

限りなく美しくて限りなく誇り高いシードに。

「シード？」

「そう。デューン知らない？ エリーゼって言う人間の娘」

どさくさに紛れてデューンヴァイスに尋ねる。

だが敢えてエリーゼが私の実姉だという事は伏せた。

そんなのは、今は不必要な情報だから。

「エリーゼ……エリーゼねえ……」

自身のたてがみを軽く撫でながら、何度かその名を繰り返す。彼はまたエリーゼの行方は知らなかったようだ。

その首がゆっくりと横に振られると同時に、私は僅かに肩を落とした。

また一人、手掛かりから遠ざかってしまったと思って。

「珍しい名前じゃねえし、生憎俺は決まったヤツからしか血を分けてもらってないんだ。こう見えても人見知りだね」

そんな訳は無いだろうと突っ込む前に、私は思わず吹き出していた。

姉の情報を得られなかった事は残念だったが、デューンヴァイスが手当たり次第な吸血行為をしない人物だと知ることが出来て、なんだかホッとしていたのだ。

私達人間が思っているよりも、案外シードは常識的な生き物なのではないかと……。

「決まったヤツって、もちろんドールなんですよ？」

「俺はドールは持たない主義でね」

妖しく笑う彼を、薄れかけた月が照らす。

「さて、もうすぐ夜明けだ。ヴァンプはさっさと退散するでしょう」

白んだ空に背を向けて、デューンヴァイスは一言「じゃあ、またな」と言い残して、日の差し込まない城内へと消えて行った。

一人取り残された私は彼の後姿を見送った後、再びバルコニーへ出てそこで夜明けを迎えた。

ここから見上げる太陽は、不思議と少しだけ霞んで見えた。それからのんびり部屋へと戻り、ふかふかのベッドに身を沈めて眠りに就く。

また“明日”を無事に迎えられる事を祈りながら。

目を閉じる直前に、そう言えば神父の姿が見当たらない事に気付いたが、おおかたどこかその辺りを散歩でもしているのだろう。私よりも神父の方が何倍もこの城の歩き方を心得ているだろうし、大した心配も必要なさそうだ。

そう思って私はつかの間の眠りへと落ちて行った。

光と闇の接点（１）

知らなければ良いことなんて生きている上では幾つもあった、いちいち覚えていられない。

聞かなければ良かった、知らなければ良かったと思っても、時を経てはそのうち忘れてしまうのだろう。

人間の記憶なんて物は、実に曖昧だ。

私が眠りに就いたちょうどその時、神父の姿はロイズハルトの部屋にあった。

偶然か必然かは知らないが、私とはどこかで入れ違いになったようだ。

私はもちろんこの場でどんなやり取りがあつたのかは知らない。けれど神父とロイズハルトのこの密談が、この先の私の運命を大きく揺るがすものであつた事だけは、間違いない。

「司祭までどうしたのだ？」

苦笑混じりのロイズハルトが頼杖を付いて、向かいに腰掛ける神

父をじつと見据えた。

「今日は来客が多い。先ほどもエルフェリスの訪問を受けたばかりだ」

「おや、さすがはエル。すみませんね、誰に似たのか向こう見ずなところがあつて」

「ふふ、それも良いだろう。用件は彼女と同じか？」

「ええ、まあ。半分ほどは」

神父はそう言うつと、いつものあの笑顔でくすくすと笑った。

しかしそこには幾らかの厳しさも混ざっていて、それは……神父が何かを秘めている時に見せる表情によく似ていた。

「ふ……ん。では残りの半分とやらをお聞かせ願おうか」

赤い液体の入ったグラスを傾けつつ、ロイズハルトは神父に続きを促した。

それを見た神父が僅かに苦笑したのは、その液体の中身を変に誤解したからなのだろう。

グラスからは甘い葡萄の香りが仄かに立ち上っている。

「話というのは他でもない、エルフェリスの事なのだが……エルをここに置くという話、考えてみては下さらないか？」

「……何故？ もちろん生身で預かれと言つのであるうつ？」

グラスを弄びながらロイズハルトが苦笑する。

一方の神父もまた、自身の前に差し出されたワインを一口含み、につこりと微笑んだ。

「生身でなくては意味が無いからね」

神父のその言葉に、ロイズハルトはダークアメジストの瞳を青く輝かせた。

「……ゲイル司祭。薄々感じてはいたが……あのエルフェリスという娘……、あの時の？」

核心を突くかのようなロイズハルトの言葉に、神父は微笑んだまま無言を貫き通す。

「答えぬという事は、肯定と受け取って良いのだな？」

じつとロイズハルトを見据えるだけで、一向に返答する様子を見せない神父に対し、ロイズハルトはそう問いかけた。

すると神父は笑みを浮かべていた顔を一变させ、普段見せないような鋭い光をその瞳に宿して頷いた。

「やはり、貴方の目は誤魔化せないようだね、ロイズ。その通り、エルは紛れも無くあの時の娘。だから尚更ここに置いて欲しいのだよ」

神父の話聞きながら、ロイズは理解できないと何度も何度も首を横に振る。

「何故だ？ 例えあの娘が白魔法使いだとしても、我々シードの前ではただの獲物だ！ それにあの娘がハイブリッドどもの手に落ちてみる……我々シードはおろか、人間だって存続が危なくなるかもしれないんだぞ！？」

「だからだ！ だからなんだよロイズ！ 安全であるはずの地域で人が喰い殺されるのは何でだと思う？ もはやハイブリッドには境

界など無いに等しいからなんだよ。エルのような白魔法使いの存在はハイブリッドからすれば目の上のたんこぶだろう？　今よりもなおハイブリッドが反抗をし続ければ、最前線にある私達の村は真つ先に襲撃されてしまうかもしれない。例え私といえども命を落とすかもしれない。エルだって……！」

眉間に深く皺を寄せ、身を乗り出して神父は叫んだ。

大袈裟に話を膨らませているわけではなく、近い将来現実となり得ることだ、と言わんばかりに。

ロイズハルトも黙って話を聞いていたが、しばらく思索した後、短く「むう」と唸った。

「だが司祭。彼女がハイブリッドにとって特別な存在である事は、我々二人以外誰も知らないんだ。万が一、襲撃なんて事になっても、ヤツらは構わず彼女を殺すだろう。ここにいるよりはリスクも少ないのではないのか？」

そして改めて神父に問う。

ここはあくまでヴァンパイアが住まう領域なのだ。

生身の人間が到底暮らしていける場所では無い。

しかし神父は何故かその問いかけに対しても否定する。

「いいえロイズ。初めは私もそう思っていた。けれどね、実はエルにも言っただけじゃないのだが、少し引かかる事があってね……」

「引かかる事？　秘密を知るようなヤツがいるとでも？」

「いえ、秘密は漏れてはいませんが……、或いは……」

「ふん。思わせぶりの発言だな。私にも話せない事が」

「断言出来ない状態ではね」

ようやく笑顔を取り戻した神父であったが、意味深な言葉の中身

を一切見せようとはしなかった。

ここまで重大な秘密を共有する自分にも話せないような事が、彼らの暮らすあの小さな村の中にあるのだろうか。とロイズハルトは疑念の目を向ける。

だが何かを疑ったところで、エルフェリスに襲い掛かる脅威を振り払えるわけではないのだ。

殺されるだけならまだしも、ハイブリッドに“あの秘密”を知られてしまう事だけは、ロイズハルトも神父も同じ様に阻止しなければならぬ事だと思っている。

「前線の村から遠ざけるといふ選択肢も無いのだな？」

「ありませんね」

きつぱりとそう言い放たれて、ロイズハルトの顔に苦い笑みが浮かんで消えた。

「ここには下手なハイブリッドは入って来ないし、あなたが正式にエルを客人として認めて下されば、いかに反抗心をチラつかせるハイブリッドといえども容易に手出しはしないだろう。……いかがか？」

神父の言葉に、ロイズハルトはしばし沈黙する。

浮かんでは消えていく様々な事柄を想定しながら。

光と闇の接点 (2)

時を刻む柱時計の音だけが、規則的に響き渡る。

「こちらとしても責任は取れない。それにこの事を知っているのは私一人。デューンやレイフィールが万が一、エルをその牙にかけようが制止は出来ない。それでもいいのだな？」

だがやがてロイズハルトは深い溜め息を吐くと、黒革のソファにゆっくりと身を預けてそう言った。

「もちろん。エルとてそれは十分承知しているはず。……と言っても彼女は他の事で頭がいっぱいで、死ぬ気などこれっぽっちも無いだろうけどね」

頭の中で必死にもがく少女の姿を想像しながら、神父はくくつと微笑んだ。

「ならば少しは安心する。どうせ限りある命なら、こんな事實は知らないまま一生を終えた方があの娘にとっても良いのだろう。彼女が飽きるまでの期間で良いのだな？」

「ええ。恩に着ますよ、ロイズ」

ソファから身を浮かせた神父は、一度ロイズハルトに向けて深々と頭を下げた。

そしてそのまま踵を返すと、いつもの穏やかな笑顔を浮かべて回廊へと繋がるドアへと向かう。

しかし、部屋を出るか出ないかのところでふいに足を止めると、そこで何かを思い出したように振り返った。

「……そうだ。ルイはお元気か？　今回は姿を見かけなかったが？」
「ああ……。いつものようにどこかほつつき歩いてるんだろ。またそのうち訪ねさせよう」

片手でグラスを弄ぶロイズハルトもまた、思い出したかのようにそう言う。神父はにっこりと微笑んで再び外へと足を向ける。

「そうしてもらえると嬉しい限りですね」

その言葉を残して、神父は一人部屋を出て行った。

去り行く彼の姿を座ったまま見届けたロイズハルトは、グラスに残ったワインを一口で飲み干すと、再びソファに深く身を預けて「エルフェリス……か」と呟いた。

そして揺らめくダークアメジストの瞳を天井まで泳がせると、ぶら下がるシャンデリアの灯りをしばらく眺めて、――目を閉じた。

自分の力では脈を打てない心臓が、どくどくと音を立てているような錯覚にしばし浸る。

どうやら今日は眠れそうにない。

この身と心がやたら騒いで仕方がないのだ。

ロイズハルトは無言で立ち上がると、彼もまたどこかへ向かう為に自室のドアを開けた。

そこで一瞬、呼吸が止まった。

一歩外へと踏み出したところで見慣れたデカイ図体が視界の端に入っただ。

先ほどまでの神父との密談を聞かれていたのではと危惧したのか、ロイズハルトの瞳から一瞬の光が発せられる。

「……いつからそこに？」
「い・ま」

まるで緊張感のない返答に、人知れずほっと胸を撫で下ろす。

「何の用だ？」

それから平静を装って一応聞いてやるが、ヤツは決まってこう言うのだらう。

「なーなー、ロイズ。ダメ？」

「しつこいぞ、デューン」

ほら思った通りの答えだと、ロイズハルトは心の中で苦笑した。
そして視線を動かすことなく歩き出す。

それに続いて、壁に背を預けていたデューンヴァイスもまたその身を起こすと、がしつとロイズハルトの肩に腕を回してきた。

「いいじゃん、ロイズ。オレ、エルに興味あんだよ。あんな面白いヤツ滅多にいないぜ？」

「ふん、随分と熱心だな。……惚れたか？」

ロイズハルトの瞳が悪戯に細められる。

「バーカ、違えよ！ オレが言っただけのはそういうことじゃないの！」

ロイズハルトの肩をポンポンと叩きながら、デューンヴァイスは至極楽しそうに笑った。

この男がこんな表情をする時は、決まってとんでもないような事

を言い出す時だ。

今回は一体何を感じ取ったというのだ？

「じゃあどういう事だ？」

「よく訊いてくれた！ あいつドールみたいに媚びないし、やたら攻撃的だし、あんなヤツ見たことないだろ？ 面白いと思わないの？」

「ほう、お前Mだったのか、知らなかったな」

「オレはいつでも攻めまくりだっつーのっ！ ……ってかそうじゃなくて！ アイツは人間っぽくないって言ってるの！ 聖職者のくせにどこか擦れてる感じがするし、それに……」

そこまで言うと、デューンヴァイスは一度言葉を切った。

黙って聞いていたロイズハルトの瞳が不審の色に曇る。

「……それに……？」

慎重に、しかし出来るだけ冷静に先を促す。

するとデューンヴァイスはロイズハルトの肩に回した腕を一旦解き、その腕を今度は口元まで持っていて、ふうと息を吐いた。

「これはオレの思い過ごしかもしれないけど……」

そう前置きするデューンヴァイスのその顔に、意味深な笑みが宿る。

「エルフェリス。アイツ……血の臭いがしねえ」

その瞬間、一面の闇で彩られた城内を、一陣の風が通り抜けた。

シードのドール (1) (前書き)

第三夜 偽りのドール

シードのドール（１）

幼い頃、大好きだった人形があつた。

何度目かの誕生日のお祝いに、神父が買ってくれた女の子の人形。目は大きくて、髪は金色の巻き髪。

キラキラ輝くドレスがお気に入りで、眠る時まで一緒だった。

女の子だったら誰もが一度はそんな人形を持った事があるのではないか。

可愛い可愛い自分だけの“人形^{ドール}”を。

私の滞在が正式に認められてからすぐ、神父はここへ来た時と同じ様にリーディアらに警護されながら、一足先に故郷の村へと帰って行った。

私に「いつでも帰ってくるが良い」と言い残して。

神父の乗った馬車が見えなくなるまで見送って、それから一人、この城での仮の棲家となった部屋へと歩き出す。

急に噴き出した冷や汗が身体を伝い、例えようもない恐怖が私に襲い掛かった。

何があってももう、心の底から頼れる者は誰一人としていない。何かが起こったその時は、私はここでひっそりと朽ち果てるのだろつ。

それでもなお、この場に留まろうとさせるのは、果たしてエリー

ぜの存在だけなのだろうか。

それとも私は別の何かに惹かれてしまっているのだろうか。
この城で朝を迎えれば迎えるほど、自分で自分が解らなくなっていた。

きつと、この狂おしいほどに咲き乱れる薔薇が私を惑わせるのだ。
ヴァンパイア達と同じ色をしたこの薔薇が……。

庭園の前でふと立ち止まり、風に揺れる花に手を伸ばした。

その拍子にひやりと冷たい花びらが一枚、ひらりと舞い落ちる。

その軌跡を目だけで追えば、誰かの足が目に入った。

慌てて視線を上げると、そこにいたのは……。

「なんだ……、デューンか」

その姿を認めて、ほつと胸を撫で下ろした。

あれからデューンヴァイス、——デューンとはすっかり打ち解けてしまった。

彼が人を喰らうヴァンパイアであるのは重々承知しているが、何かと気さくに声をかけてくる彼に対して気を許してしまうようになっている。

次の瞬間には彼の足元で冷たい骸になっているかもしれないとも……。

「がっかりすんなよ、エル。オレじゃない方が良かったか？」

相変わらずの白い顔から白い歯を覗かせて、ニヤリと笑うデューン。

そんなの「アンタで良かった」に決まっている。

他の見知らぬヴァンパイアに声なぞ掛けられていたら、答える間もなく光の速さで逃げ去っていただろう。

そんな心境。

「デューンは？ 部屋に戻らなくていいの？」

「いいのいいの。待ってるドールなんかいいえし」

デューンはそう言うとその場に屈んで、形の良い鼻を薔薇の花房に近づけた。

その拍子に花が揺れて、甘い香りが立ち上る。

「まあ、そんなに余分な力はいれずに過ごせばいい。ロイズがリーディアを引き続き護衛として付けるって言ってたし、困った事があれば助けてもらえ」

「なにそれ」

余計な心配など無用だと言わんばかりに、私はそっけなく横を向いた。

が、再び立ち上がったデューンは背を丸めて私の顔を覗き込むと、余裕たつぷりの表情でふふんと鼻を鳴らした。

「びびってんだろ。いつもの威勢の良さがねえぞ」

「う……うるさいなっ！！」

痛いところを突かれて内心ドキツとした。

ヘラヘラしているようでもデューンはよく人を“視ている”。

私に限らず、周囲にいる者全てをよく観察しているのだ。

気さくに人の心に入り込み、不審な動きを察知すれば忽ち強大な敵へと変貌するのだろうか。

やはりあまり隙を見せる事は出来ないと再認識させられる。

「ねえデューン」

「ん？」

「今までさあ、アンタのドールになりたいって言った人間ていなかったの？」

ただただ不思議に思ったから問いかけた。
が、デューンは何だか楽しそうに笑う。

「なに？ オレのドールになりたいの？」

「はっ！？ んなワケないでしょーがっ！ ただ何でアンタだけドールを持たないのか知りたいの！！」

「何だ、つまらん。エルならドールにしてやっても良かったのに」

そう言つとデューンはいきなり真顔になって、私の手首をがっしりと掴んだ。

そしてその顔をさらにぐつと近付ける。

目の前にセピアゴールドの瞳が揺れていた。

シードのドール（2）

「な……なによ……」

目を逸らしたいのに逸らせない。
不思議な力に束縛されたように、私はじっと固まってしまった。

「エル……」

デューンが私の名を耳元で呟く。
彼の熱い吐息が首筋を掠めていった。

……ヤバイ。
私さっそく……殺される？

そう思った途端、私は全てを後悔しながらギョツと目を閉じた。

「スカート破れてる」
「えっ?!」

慌てて目を開けスカートの裾を摘むと、薔薇の棘に引っ掛けたのか、大きく開いたスカートの穴から私の太股が覗いていた。

「ぎゃーっ!!」
「いいじゃん、そっちの方が色っぽいぜ」

狼狽する私に対して、デューンが爆笑しながらフォローとも思える言葉を発する。

けれどそんなのフォローになるか！

「やつべー、やつぱ面白い。褒美にドレスをやるう」

何が褒美モノなんだかよく分からないが、デューンはアワアワしている私の身体をひよいと持ち上げると、逞しいその肩に担いだ。いきなり視界にデューンの背中が広がって、更に何がなんだか分からない。

オマケに。

「ちよつとっ！！どこ触ってんのよ！！」

どさくさに紛れてデューンの手が外気と人目に曝された太股に伸びて、サワサワと蠢いた。

「わわわわ、ちよつとお！！エロヴァンプッ！！」

「まーまーいいじゃん。ヴァンプはみんなエロいの！ 気にすんな」

肩の上で暴れる私を押さえ付ける様に足を触りながら、デューンはにやりと笑った。

そしてそのままの状態で、城内の衣装部屋まで連れて行かれる。途中、幾つも輝く鋭い光に気付きもせずに。

「よし、好きなもの選べ。てか好きなだけ選べ。どうせ服もあんまり持っていないんだろ？」

本当に衣装だけの部屋なのかと思うくらい広いクローゼットの真ん中でようやく下ろされた私に、デューンは至極楽しそうにそう言った。

そして自らはそこに置いてある大きなソファに身体を投げ出す。

「好きなのって……」

一通り見るだけで相当の時間が掛かりそうなんです。大量のドレスの前でオロオロしていると、寝転がったままのデューンが「足見えてんぞ」とからかうものだから、私は慌てて服探しに取り掛かった。

ここへは最小限の荷物しか持って来てないのは事実だし、この際だからデューンの好意に甘えてしまおう。けれど……。

「ねえデューン。ここってドレスしかないのー？ ……ってアレ？」

しばらくドレスの海を彷徨っている間に、ソファからデューンの姿が消えていた。

「あれー？」

さっきまでは確かにソファに寝そべっていたのに……どこかへ行ってしまったのだろうか。

そんな風に思いつつも、とにかく早く探してしまおうと後ろを振り返る。

「デューン様ならロイズ様と表に出て行かれましたわ」

私のぴったり背後に見知らぬ女性が立っていた。

「うわっ！！」

体全体で驚きを表現した私に、彼女は少し嘲りの表情を込めて苦

笑する。

豪華なドレスに身を包み、さらには大粒の宝石でその身を彩っていたその女性は、私を見て不思議そうに首を傾げた。

「見かけない方だけど、新しくドールになった方？ どなたの？」

そう言った女性の顔は一転して穏やかに微笑んでいたが、その瞳は少しも笑ってなどおらず、私は密かに身を震わせた。

「いや、私はドールじゃ……」

「あら、じゃあ人間？」

「はあ……」

私の返答を聞いた途端に大袈裟なほどの驚きを見せる彼女。

肌はやや色白だが、赤み差す頬や白い肌から浮き上がる蒼い血管はどう見てもヴァンパイアのそれではない。

とすると……。

「ドール以外の人間なんて初めて見たわ、この城で。デューン様だったら一体どういう風の吹き回し？」

形の良い掌で口元を覆い、女性はあからさまに眉をひそめる。

さつきから聞いていれば人間人間て言うけれど……。

「あなたドール？」

いい加減うんざりしていた感情をなんとか心の奥底に押し込んで、必死に取り繕った笑顔でそう問いかけた。

すると彼女は「当然だろう」といった言葉をやや乱暴に投げつけてくる。

何がそんなに気に入らないのか知らないけれど、綺麗な身なりを
していても初対面の者に対する礼儀とやらは知らないらしい。

ドールは人間。

ヴァンパイアと血の契約を交わした人形。

ヴァンパイアの呪いとも言われるその約定は、どんなに大量の血
液を抜かれても、ヴァンパイア化せずに生き続ける事の出来る身体
に造り変えるものだとされている。

一度契約を交わせば、破棄せぬ限り人としての記憶は失われ、契
約主の為だけの僕としてヴァンパイアと行動を共にするのみ。

それはまさに、生ける人形^{ドール}。

「私はロイズ様のドールなの。カルディナよ。ひとまずはよろしく」

「私は…… エルフェリス」

カルディナの差し出した手に自分の手をゆっくりと重ねた。

トクトクと脈を打つ、血の廻りを感じる掌に新たな驚きを覚える。

ドールは人間であって人間でない人形。

ずっとそう思っていたから。

ずっとそう思われていたから。

「あの…… エルフェリス？ そろそろ放してください？」

「あ、ごめんなさい！」

彼女の手をずっと握り締めたままだった事をすっかり忘れていた
せいで、さらにカルディナの気を悪くしてしまったようだ。

慌てて手を放したが、彼女は私が握っていた手をもう片方の手で
擦りながら、私をキツと睨み付ける。

「エルフェリス。どなたのお招きかは知らないけれど、ここにはこ

このルールがありますの。人間といえども守ってもらうものは守ってもらいますわよ」

不敵に笑う彼女の首筋から、まだ新しそうな噛み跡がちらりと覗いていた。

必要以上に紅く蠢くその傷が私の中に新たな戦慄を生み、何とも言えない不快感を引き起こす。

ドクンと大きく、鼓動した。

シードのドール（3）

「……ルールって？」

カルディナの笑顔の裏に隠された真意を読み取ろうと、私もあえて表情を和らげた。

初めから何となく気付いてはいたが、カルディナの私に対する言動は全て善意によるものではない。

気付かぬ振りをし通そうと思っていたのに、私は確信してしまった。

危うく彼女のペースに乗せられてしまうところだったが、そうは行かない。

「どんなルール？ 教えてください」

刺激しない程度の挑発を。

「人間の私にも解るように……ドールのカルディナさん」

挑発を。

心の奥底に黒い炎が灯る。

「おいエル、見つかったか？」

その時、衣裳部屋のドアが開かれ、デューンと何故かロイズハルトも中に入って来た。

「ロイズ様！ デューン様もご機嫌麗しく」

突如態度を一変させたかと思うと華やかに微笑むカルディナを尻目に、私は小さく溜め息を吐いてロイズハルトを一睨み。

女の趣味悪いんだよ！　と思いながら、さらに舌打ちも加えておいた。

こんな姿、神父の前でしたら絶対殴られるだろうとは思っただけ
れど、抑えきれない。

そこまで大人になりきれない。

「なんだ？　やけに機嫌悪いじゃないか、エルフェリス」

訳も解らないまま八つ当たりの標的にされて、ロイズハルトが苦笑する。

「べつつにい？　ところでさあ、ドレス以外の服って無いの？」

「ああ……そういうば無いかも」

口を尖らせたままの私の質問に、デューンが思い出した様にそう答えると、ロイズハルトも同様に頷いた。

「ドレスが嫌なら切れば良い」

そうしてニヤリと笑う。

「え？　切って良いなら切るけど？　ドレス動き辛いし。あ……でも……」

一度言葉を切り、ちらりとカルディナを一瞥する。

案の定彼女は、シードと私のやり取りを面白くなさそうに見つめていた。

人形も人並みに嫉妬するのかと心の中で嗤う。

「でも？」

「勝手にドレスを改造するのは“ルール違反”かな？」

強調するようににつこり笑ってカルディナに問うと、何とも言い難い複雑な笑顔が返ってくるのみだった。

もちろん彼女が主張するルールと言うのがドールの中だけで存在するものだという事くらい初めからお見通し。

これはちよつとした反撃だ。

私に喧嘩を売ると、こういう結果になると言う事を今のうちに思い知らせてやる。

「ここにあるものは好きにして良いと他の者にも言っている。だからエルフェリスも好きにすれば良い」

ロイズハルトのお墨付きとあらば、カルディナだって口を噤むしかないだろう。

真一文字に結ばれた唇と、微かに引き攣る眉頭が彼女の心中を顕著に示しているようだった。

けれど、差し出されたロイズハルトの腕に嬉しそうに絡みつくカルディナの姿に、私は何故かホッとしたものを覚えた。

何故だかわからない。

同時に感じるこの軽い痛みさえも。

「用が済んだのなら行くぞ、カルディナ」

「はい！」

すでに選んであったのだろうドレスを空いた腕にかけると、カルディナはロイズハルトを愛おしそうに見つめたまま、彼にエスコ―

トされ部屋を出て行った。

私とデューンはそれを静かに見送る。

「アイツになんか言われた？」

二人が立ち去ってすぐ、真顔のデューンにそう聞かれたが、私は緩く首を振ってみせた。

「たいした事じゃないよ」

デューンから誤魔化すように目を逸らす。
くだらないただの争いだ。
わざわざデューンの耳を汚す事もない。

「まあ、それなら良いけど。カルディナはロイズのドールの中……
つか、ドールの中でも力を持つてるヤツだからな。結構始末ワリ
イぞ」

「えっ!？」

デューンの忠告に私は思わず声を上げた。

「ロイズって何人もドール持つてるのッ!？」

「てかツツ込むとこ間違ってるだろ!」

半笑いのデューンにおでこをベシツと叩かれて、私もつられて吹き出した。

「まあいいや。とにかく何でも良いから着替えろ。誘ってんのか？」
「は?」

一瞬キョトンとしてしまった私に向かってデューンは妖しく微笑むと、私の腰をぐつと引き寄せて破れたスカートの穴から露出する太股に触れた。

「ぎょえーっ！ このエロバカッ！」

デューンの胸を両手で押し返し、一番近くにあったドレスをむんずと掴むと、そそくさフィッティングルームへと逃げるように駆け込んだ。

「エールー。生着替えでも構わないぞー！」

「うるさいッ！」

「あはは」

能天気には力笑いするデューンの声を全身に浴びながら、大慌てで着替える私。

それでも一応聖職者なのに！

なんて迂闊だったんだろう。

今日だけで二度も足を触られてしまった。

それも男性に。

ヴァンパイアに。

「デューンのバカヤローっ！」

沸々と湧き上がる怒りを爆発させながら、袖に腕を通し、背中の方スナールを何とか上げる。

デューンはその間、ソファに仰向けに横たわり、くすくすと笑い続けた。

「……ホント……変なヤツ……」

そう弦きながら。

ドールが見る夢（１）

女の噂と結束力はどうしてあんなに強大なのだろうと、いつも思っていた。

昨日の敵は今日の仲間、今日の仲間は明日の敵、と言わんばかりに刻一刻とメンバーを入れ替えながら、いつか飽きるまで続いて行くのだ。

やられる側としては針のむしろ。

じわりじわりと真綿で首を絞められていくような感じなのだろう。

「ああ、またッー!!」

部屋のドアを開けたリーディアが、一秒もしないうちにそう叫んだ。

遅れて顔を出した私も、またか、とうんざりしてしまう。

カルディナに出会った翌日から、私の部屋の前に毎日不審な箱が届くようになった。

一日目はズタズタに引き裂かれたドレス。

二日目は泥にまみれたブーツ。

そして三日目、四日目は……いちいち覚えるのも面倒くさい。

「悪質ですね。さっさと処分してしましましょうー!」

私が中身を確認する前にリーディアがその箱をさっさと持ち去る

うとすると言う事は、今日は相当ヤバイ物でも入っていたのだろうか。

一応確認させてくれと主張してみたものの、今日ばかりはダメだとリーディアに強く押し返されてしまった。

それどころか。

「大体！ エルフエリス様もエルフェリス様です！！ いい加減シードの方々に苦情の一つでも言ったらどうですか？ このままではエスカレートする一方ですわよ」

毎日毎日腹を立てつつも、それでも最後は「悪い悪戯だ、気にするな」と笑って終わらせていた彼女も、さすがに今日と言う今日は我慢の限界を超えたらしい。

一度持ち上げた箱を足元に置いて、くどくどくどと説教は続く。

「とにかく！ さっさとお着替えになって！ ちょうど今日は月に一度の庭園茶会の日ですし、私がシードの方々にガツンと言って差し上げますわ！！」

リーディアはそう言つと、声高らかに握り締めた拳を振り上げた。あまりの勢いにこっちが腰を抜かしそうになる。

「いいよいいよリーディア！ ほつとけば良いんだって！」

「いいえ！ いくらなんでもこれは悪質ですわ！ それにエルフェリス様の身辺警護を承ったからには、危害を加えようとする輩を厳しく排除しなければなりません。それに……これはドールの仕業でしょう。彼女らは毎回自らの所有者が新しいドールをお迎えになる度、このような仕打ちを繰り返してきました。こんな風潮はどこかで誰かが断ち切らねばなりません」

リーディアの力説に私はすっかり言葉を失ってしまった。

だってそれって早い話が、ただの居候の人間の私がドール達の嫉妬の対象になっっているかもしれないという事だろう？

ドールを持たない主義のデューンはともかく、ロイズハルトやレイフィール、それにこの城に駐留している上位ハイブリッドに至るまで、私はほとんど接触する事すらなかったのに。

それなのに？

「ドールでない人間がこの城に居住する事自体前例が無い上に、エルフェリス様は女性。ドール達は一種の危機感を感じているのかもしれないわ」

やや落ち着きを取り戻して、リーディアがそう言う。
けれど……。

「ドールになる気も、ハイブリッドになる気もないよ！」

「そんな事、彼女達はいつでもいいのです。問題はエルフェリス様のお気持ちではなくて所有者であるシード方のお気持ちなのです」
「どういつコト？」

いまいち話が見えずに、私はただただ首を振る。

するとリーディアは着替えのドレスを私に手渡しながらこう言った。

「デューン様のお心を捉えたエルフェリス様を、みな恐れているのでしょう」

くすくすと笑うリーディアに、私は全力で否定する。

「違うよ！ デューンはあたしをからかってるだけだって。深い意

味なんかないよ」

「それなのですわ」

「え？」

意味が分からないと首を傾げる。

からかわれているのがどうしてドールの嫉妬に繋がるのだ。

例えばデューンが私にハッキリとした好意を示しているのなら理解できる。

でも違う。

デューンは私をからかって楽しんでるだけだ。

ドールが私を恐れる理由なんか無いはずなのに。

「デューン様は他のヴァンパイアと違って身体がしつかりなさっているでしょう？　彼は本来シードの中でも武闘派、闘将一族の方なのですわ」

「とう………しょう？」

「ええ。ヴァンプの中でも体力的に優れた一族の血を引く方で、その能力を生かして大きな戦争などでは中核として活躍されたりもしていました。昔の話ですが……。そんなあの方が初めて女性に興味を示されたのです。ドールの心中は穏やかでなくて当然ですわ」

「買いかぶり過ぎたって」

人間とヴァンパイアの間で戦争があつた事は文献や人伝ふしづなどで知っていた。

それはもちろん盟約締結以前の出来事。

記録では数度とされるその戦いはいずれも人間側から引き起こされたもので、決着という決着はつかなかったとされる。

しかし本来ヴァンパイアの弱点ともいえる体力の欠如をもろとせず、肉弾戦においても凄まじいまでの力を発揮した者達がいた事をその文献の筆者は特筆していた。

あのデューンがその一族の血を引くヴァンパイアとは。

「でも……そういう人なんだ。だからあんなに観察深いんだね」

「ええ。闘将一族ただお独りになった今でも、デューン様は常に城内に出入りする者達には目を光らせております。だからその責務の妨げとならぬよう、ドールをお持ちにならないのです。ドールは血を提供するだけの存在ではありませんからね」

この前訊きそびれてしまったが、デューンがドールを持たないのにはそんな理由があったのか。

確かに、ドールは血の為にだけに存在する訳ではない。

昔からドールはヴァンパイアにとっては愛人のようなものだと言われてきた。

居城の平安を見守る者にとっては、愛欲まみれのドールは時に邪魔な存在となり得るのだろう。

「ヘラヘラしてるのに意外と硬派なんだね」

「ええ。どんな美姫^{びき}がデューン様に迫っても、見向きもされなかったらしいですからね」

「はは。どんな顔して振るのか見たかったなあ」

笑いながらもドレスに袖を通し、姿見の前に立って細かいところを調整した。

曲がったスカートを調べて、少し上に持ち上がった袖も伸ばす。

「よし、完璧！ どう？」

「素敵だと思いますわ。髪が伸びれば本当にお人形のように」

胸の前で両手を合わせるリーディアは私の後ろに立って、私の姿を見ながら少女のようにはしゃいでいた。

ふわふわ弾む膝丈のスカートに、何だか私の心も躍る。

ドレスの色は黒だけど、惜し気もなくレースがふんだんに使われていてとても綺麗。

カルディナと出会ったあの日に適当に掴んで持ってきたドレスのうちの一つだ。

リーディアが居城に戻ってくるまでの数日間部屋に引き籠もってもらったドレスを全て好みの形に作り替えた。

着慣れない上に、やたら長い裾を引き摺って歩くのは好きじゃない。

それにドールと同じ様な格好をするのは……正直気が引けた。

「明日から箱の数増えちゃったりしてね」

私が冗談ぽくそう言つと、リーディアはくすくす笑って「阻止してみせる」と意気込んだ。

ドールが見る夢 (2)

やがて茶会の開始を知らせるベルが鳴り響き、続々とヴァンパイアやドールが集まる中、私もリーディアを伴って庭園へと赴く事にした。

私達が庭園へと下りる頃にはもうすでに数多くの群衆で賑わいを見せていた。

この城にこんなたくさんのヴァンパイアやドールが住んでいたなんて知らなかったが、リーディアの話によるとこの茶会の為だけに居城に出向いて来る者もいるのだそうだ。

なるほど、と彼女の話の聞いていると、突如現れた一人の男。

「あら、ヘヴンリー。珍しいじゃない」

そう、この男もどうやら例外ではなく。

「ちょっとご機嫌伺いにね」

両腕と背後に自らのドールを数人従えたヘヴンリーは、意味ありげにニヤリと笑ってリーディアと軽く言葉を交わすと、ゆっくりと私の目の前に立ちはだかった。

「よう、エルフェリス。この前はどーも」

「こちらこそ」

顔半分を不自然に吊り上げ笑うヘヴンリーに負けじと、満面の笑みを造ってみせる。

「まさかここでも会うとは思ってもみなかったがな」

それはこちらのセリフでもあるのだが。

目まぐるし過ぎる居城での日々で、正直この男の存在を忘れてしまっていた事はさすがに口には出来ない。

私の事を突き刺す様な目で見てくるドールもいる手前。

「それは残念。ここにしばらく置いてもらう事になったから、また会う事もあるかもしれないけど」

ありったけの皮肉を込めてそう返す。

するとヘヴンリーはその両腕に絡みつくドールの腕を鬱陶しそうに振り払って笑った。

「通りで。シードのドール共がやたら煩いと思った」

ヘヴンリーの言葉に彼のドールらも一斉に笑い出す。

ああ……コイツら揃いも揃ってウツザイなあ……。

何とか心を落ち着かせようと僅かに視線を逸らして深呼吸をしていると、私の前にずいっとリーディアが出てきて一喝した。

「静まりなさい！ 下品ですわ」

未だ見たこともないような冷たい表情をしたリーディアが至極低い声で忠告すると、ドール達はビクツと身体を震わせて口を噤んだ。しかしヘヴンリーは余裕の笑みを湛えたまま、怯えるドールを慰める。

「ようリーディア、あんま脅かすな。お前みたいに心臓に毛が生えてるヤツは生憎いないんだよ」

「ならば自分のドールくらい教育しなさいな。ヘヴンリーともある者が笑われますわよ」

挑発するような眼差しを向けるヘヴンリーに対しても、リーディアは毅然と立ち向かった。

その姿になおも怯え続けるドール達が酷く滑稽に思えるくらい。

「ふん、余計なお世話だ。とにかくシードのドール達には近付かない方が良さそうだぜ？ 奴らは何かと物騒だからな。お前の手には負えないと思うぜ、エルフェリス」

「どういう事よ」

「それはリーディアの方がよく知ってるはずだろ？ アイツに聞けばいい」

しばしの沈黙の後に、ヘヴンリーはそれだけを言うと言再びドール達の手を取って、群衆の中へと消えて行った。

「何よあれ」

言いたい事だけ言ってさっさと逃げるだなんて。

「申し訳ありません、エルフェリス様」

ヘヴンリーの後姿を見つめながら、リーディアは私に向かって頭を下げた。

別にリーディアが謝る事ではないと言っても、彼女はバツの悪そうな表情を崩さなかった。

「怒るのも文句言つのも私の役目！ リーディアは気にしなくて良いんだよ」

「しかし……」

「いいの！ ドールっていっぱいいるんでしょ？ いちいち相手にしてたらキリがないって」

「それはまあ……そうですが……」

そう、私にはそんな暇はない。

ドール達の勘違いで嫉妬されるのはハッキリ言って迷惑だが、それよりもやらなければいけない事があるではないか。

エリーゼの消息を掴んだらここからさっさとサヨナラするつもりだし、自分から事を荒げるつもりは毛頭ない。

出る杭は打たれるものと決まっている。

何も成し遂げていないうちから打たれるのはゴメンだ。

だが、私は今、ドールとトコトン対決する事を決めた。

矛盾しているだろうか。

いいや、これで間違っではないはずだ。

「リーディア言ってたよね？ ドール達の悪い風潮は誰かが止めなきゃいけないって。それ、あたしがやるから」

「ええっ!？」

押され気味に話を聞いていたリーディアも、私のこの発言にはさすがに驚いて叫んだ。

恐らくリーディアは自分一人で何とかしようと考えていたのだろう。

でもそれでは私の気が済まない。

私にはドールと対決する理由も自信も十分にあるし、根拠は無いが勝算もこちらにある気がするのだ。

こんなこと、ドールらの前で公言してはまた嘲り笑われてしまうだろうが。

「どっちにしても今は私が受けて立たなきゃいけない問題なんだよ。少なくともカルディナは私の事をよく思っていない。彼女から目を逸らすのは簡単だけど、あたしはこの城で“捜し者”をなきゃいけないんだ。その為にはいずれば彼女達の協力も必要になるかもしれない。だから多少手荒な手段を使っても、ドールにはあたしの存在を認めてもらわなきゃ！」

言葉の最後の方はほぼ自分への決意のようなものだ。

もしこの城に集うヴァンパイアが悉くエリーゼを知らなくても、ドールならば何かを知っているかもしれないとふいに思った。

女の噂は広まりやすい。

多少の尾ひれは付くかもしれないが、ヴァンパイアだけにあたるよりも可能性は各段に広がる。

「ただ……さ。ホントにヤバイ時は……助けてくれる？」

リーディアならば信頼出来ると思えるようになったから。だからもしも私がピンチの時は、彼女の助けを請いたい。

「も……もちろんですわ!!」

大きく頷いてリーディアは微笑んだ。

その答えが嬉しくて私もつい目を細めた。

私、ここに来てからの方がよく笑ってる気がする。
変なの。

ここには私にとって何一つの安らぎなどあるはずもないのに。
私は変だ。
変だ。

その時ふと、群衆の中にドールを従えて誰かと談笑しているロイズハルトの姿が目に入った。

彼の傍らには当然の如くカルディナ。

あの時と同じ様にしっかりとロイズハルトの腕に絡み付いては、他のドールに対して鋭い眼差しを見せている。

その姿を認めて、私とリーディアは思わず顔を見合わせて苦笑してしまった。

「ドールも案外大変そうだね」

カルディナの様子を見る限り、この様な公の場でロイズハルトの腕を取れる者は、彼のドールの中でも突出した存在なのだろう。

彼が引き連れているドールはやはり数人いたが、ヘヴンリーのようなまさに両手に華状態でないとところを見ると、どうやらカルディナがロイズハルトの“一番”のようだ。

——なんで？

なんでなの？

なんで胸がチクチク痛むんだろう。

心臓が動く度に、見えない針で突付かれているようだ。

苦しい。

息が出来ない。

息が出来ない。

「カルディナも……哀れな女なのですわ」

ふいにリーディアがそう呟いたのが聞こえて、私は改めて彼女の方に向き直った。

いつもの声色と違うように感じたから……。

「リーディア？」

さっきまでの様子とは明らかに違う彼女の顔を窺うように声をかける。

けれどそんな私の姿さえ目に入っていないのか、どこかを見つめたままのリーディアは語り続ける。

遠い遠い過去に、想いを馳せながら……。

リーディアの過去 (1)

「見てはいけない夢を見ているのですわ。カルディナも……他のドール達も……」

何かを想い出すように呟いたリーディアの瞳から、色が失われていく様な錯覚を覚えた。

彼女の目に映る景色も、或いはどこか別の場所を映しているのではないか。

そんな印象すら受ける。
けれど私は思うのだ。

「ドールだって一応は人間だもん。夢や希望くらいあるよ」と。

しかしリーディアはゆっくり顔を横に振る。

「いいえ、ドールとなった者は、期待や希望など持つてはいけないのです。だって……ドールは人であって人で在らざる者。——人形なんですもの」

リーディアらしからぬ発言に、私は少なからず衝撃を受けた。
そんな事は無いと言おうとした口がうまく開かず、呆然と立ち尽くすばかり。

人であって人で在らざる者。

確かにドールは人間であって人間ではない。
ヴァンパイアに改造された身体はもはや人間のものとは言い難い。
例え致死量に値する血を抜かれようと、ドールは生き続けるの

だから。

「血の契約を交わしたって……人の心は失くさないよ」

私のカラカラに渴いた喉をようやく通り抜けた言葉は掠れていた。記憶は失くしても、心は失くさない。

生きているのだから。

人間にもヴァンパイアにも心があるように、意思があるように、ドールにだってそれは存在するはずだ。

それなのに、リーディアは尚も否定するように首を振る。切なく微笑みながら。

「もちろん心は生きています。心は自由。人としての記憶は失っても……。だから厄介なのですわ。いつそ心もリセットして下されば……」

伏せた紅い瞳が大きく揺れたのを私は見逃さなかった。

そしてその言葉の意味も。

私は……何も言えなかった。

「エルフェリス様。私はドールでしたの」

リーディアが笑う。

泣くように嗤う。

ああ、やはり。

彼女も人間だった。

人間だった。

「今のカルディナはあの頃の私と同じ……」

「……同じ？」

ようやく反応した私に柔らかく微笑んで、彼女は頷いた。

「ロイズ様に一番愛されているのは自分だと。……あらぬ夢を……」

自嘲の笑みを浮かべながら、リーディアは遙か向こうで誰かと語らうロイズハルトに背を向けた。

心なしか、その指先が震えていた。

もともと気の利かない私には、かける言葉も見当たらない。

ただただリーディアとロイズハルトの姿を交互に眺めることくらいしか出来なかった。

複雑で、言いようの無い感情に戸惑っていたのだ。

特定のヴァンパイアと“血の契約”を交わした人間はドールとなる。

このくらいの知識はあったけれど、これまでヴァンパイアと接触すら持ったことのない私がその詳細心理を知り得る訳がなく、多少混乱していたのかもしれない。

ドールとなる者が後を絶たない理由も、血の契約がどのような物であるのかも、実際は意外と知られていないのだから。

ひとまず私はリーディアの手を引っ張って庭園内を移動すると、群衆から少し離れた茂みの中に並んで腰を下ろした。

リーディアの話を聞いていたら、カルディナに対する怒りも一緒に沈んでしまった。

人形扱いされても、それでもヴァンパイアにしがみつこうとするドールを理解出来ない。

けれど何故か切なくて苦しくなる。

心をリセットしてくれだなんてセリフは、悲しすぎるドール達の現実だ。

心を失くしてしまつたら、その者は存在意義すら失つてしまふというのに。

「私はもともと商家の娘でしたの。遙か彼方まで広がる青い海がとても美しい街でした」

突如人間であつた頃の話をし始めたリーディアを、私はじつと見つめた。

彼女は星の煌めく空を仰ぎ、大きく息を吸い込んでいる。

「あの頃はまだヴァンパイアと人間の間に境界など無くて、夜毎どこからともなくやって来るヴァンパイアの影に怯える日々でした。私ね、こう見えて意外と箱入り娘でしたの。実家は裕福で、両親はとても厳しい方でした。いずれはこの家に相応しい殿方をお迎えして、家を継ぎなさいと……ずっとそう言われて育ちました」

「なんか分かる気がする。リーディアの気品は半端ないもん」

思わずくすくすと笑いが込み上げてきて、私はリーディアにそう言つた。

彼女の綺麗な言葉、優雅な物腰、どれを取っても溜め息が出るくらい美しい。

自分が恥ずかしくなるほどに。

「まあ、そんなたいそうなものではありませんわ。けれどね、エルフェリス様。私はそれでも、彼らへの好奇心は捨てられなかったのですわ」

「好奇心？」

「ええ。箱の中にいればいるほど、箱の外に興味を持つものです。私は愚かにもヴァンパイアというものを一目見てみたいと思うようになつていたのですわ。そしてある夜、ついに家を抜け出して、街

外れの廃墟と化した教会に身を隠して外を窺ってましたの。ちょうど今と同じ様に」

そう言うのと、リーディアは茂みの隙間からロイズハルトを指差し、オリーブ色の瞳と真つ赤に染まった瞳を同時に細めた。まるで少女のように。

「その教会付近ではヴァンパイアが出るといふ噂があつて、私は居ても立つてもいられなくなりました」

——本当に愚か。

そう言つて夜空を見上げるリーディアには、ヴァンパイアの面影など感じられなかった。

むしろ人間であるかのように錯覚した。

ヴァンパイアは、あまり過去を懐かしがらない。

振り返らない。

永劫の時を生きるヴァンパイアにとって過去など幾らでも修正出来る、再現できるものなのだから。

だからその逆として、人間は有限の命であるが為に日々後悔の連続だ。

何かをしては、ああすれば良かった、こうすれば良かったと悔やみ、それでも更なる高みに憧れて。

そしてまた後悔するのだろう。

自分には到底手に負えないものであつたと。

けれども時にそれが案外いい思い出になったりもするのだから不思議だが。

——リーディアは……悔いているのだろうか。
人を“捨てた”事を。

リーディアの過去 (2)

こっそりとリーディアの顔を窺う。

いいや、そうではない。

彼女は決して悔やんではない。

だってリーディアはいつだって眩しいほどに輝いているから。

私にはそう見えるから。

「初めてロイズ様をお見かけした時は、本当に息が止まりました。離れていても感じるその存在感と威圧感に圧倒されました。それから毎晩私は家を抜け出しては廃屋へ通い、ロイズ様のお姿に心をときめかせる様になりました。愚かな事だと分かっていながら私は……あの方に惹かれてしまった……」

夜空を仰いだままのリーディアは、そこまで語ったところでふと目を閉じた。

頭上で輝くあの月の光を拒むかのように。

「だから……ドールになったの？」

今までずっと口を挟んだらいけないような気がして黙っていたが、ふいの沈黙に私は思わずそう訊ねてしまった。

するとリーディアはひどく切ない表情のまま、何度も頷く。

「偶然、他の女性の首に顔を埋めるロイズ様を見ってしまったのですわ。その途端に胸が締め付けられてどうしようもなかった。掻き乱される心が痛くて、あの方のお傍に居たいと強く思いました。それからすぐ、廃屋でロイズ様に見つかってしまった……」

どうやら毎晩毎晩顔を出すリーディアにロイズハルトが気付いていたようだ、彼女は言った。

声を掛けられて、それはそれで驚いたものだ、と無邪気に笑う。

そりゃそうだろう。

憧れの人が突然目の前に現れたら、私だって驚く。

けれどリーディアは相手がヴァンパイアでも全く恐怖は感じなかった、そして自ら望んでドールとなったのだと、私に明かしてくれた。

どうして私などにそこまで話すのか疑問に思っていると、彼女もまたそんな私の心中を察したのか、もういつものリーディアの顔で華やかに微笑んだ。

「不思議です。エルフェリス様の前だと自分に素直になれます。人を捨てた私にも、神は慈悲を与えて下さるというのかしら」
「神はどこにだって誰にだって平等だよ。……私はあまり信用してないけど」

人間が聞いたら、これが聖職者の言う言葉かと叱咤されてしまいそうだが、実際私はあまり神を信じてはいない。

だって神は、私の願いを聞いてはくれなかったから……。

そんな私の台詞に、リーディアは綺麗な手のひらを口元に当てる。

「まあ、ホホホ。ですからね、私もドールとして生きた身。カルデイナや他のドールの気持ちも解らなくもないのです。ドールとなった以上、やはり主である方にとっての特別な存在となり得るのですから。その中で互いに寵を競い合い、更なる特別な地位を得るというのは、ドールにとって最高の夢だと信じられてきましたわ。けれどその先には何もありませんでした。ただただ……絶望するのみでしたわ」

もう過ぎ去った昔話だとリーディアは笑っていたが、私にはどうしても彼女が泣いているようにしか見えなかった。

それに絶望なんて言葉は好きじゃない。

出来れば聞きたくなかった、そんな言葉。

けれど自らの人生を、記憶を犠牲にしてまでロイズハルトに尽くした彼女にとってはまさしく、絶望の未来が待っていたのだろう。ヴァンパイアからすれば、ドールなど使い捨ての利く便利な道具に過ぎないのだから。

リーディアにかける言葉を探して、私の視線は何度も何度も宙を彷徨った。

けれど思い付くものはどれも陳腐で在り来たりで、とても口に出るようなものではなく、ひとつ言葉を噛み潰す度に、ひとつ溜め息が漏れた。

「たとえ儚いものでも、ロイズ様の“一番”になれて幸せでした。でも……ロイズ様は他のドールに対しても優しくかった。結局、あの方にとつての“一番”など存在しないのですわ。ロイズ様は私達を平等に愛してくれた。けれど決して心は下さらなかった。それを悟つてすぐ、私はロイズ様との契約を破棄したのです」

「……それでハイブリッドに？ 人間に戻ろうとは思わなかったの？」

私の問いかけに、リーディアはまた切なそうに苦笑する。

「人間に戻るには、遅すぎたのですわ」

何もかも……。

リーディアはそう呟いて、また目を伏せてしまった。
遅すぎた。

彼女がどのくらいの間ドールとして生きたのかは定かではないが、恐らくはもう、帰る場所を失ってしまったのだろう。

ドールとなった瞬間に、その者の時は止まる。

成長も、命の灯火も、全てがドールとなった瞬間で留まり続けるのだ。

それでも人間なればこそ、どこかで命の終わりは突然やって来らしいが。

「ロイズ様をお慕いしておりました。心の底から。けれども今は、あの方の愛を期待などしていません。お傍でお仕えさせて頂くだけで幸せだと思えますの。私も成長しましたわ」

くすくすと笑顔を見せるリーディアに対して、私は無言で頷く事が精一杯だった。

なんて波乱な人生を歩んでいるのだろうと改めて思う。

好奇心の果てにロイズハルトと出会わなければ、彼女はここまで激動の人生を歩む事などなかっただろう。

けれど私達が知らないだけで、彼女と同じ様に運命の渦に巻き込まれてしまった人間は、きっと果てしなく多い。

ヴァンパイアはいつも私達人間の運命を、いとも簡単に破壊していく。

それでも同じ時を生きる者として、共存への努力を続けてきた。

たくさん涙と悲鳴を飲み込みながら。

この世界の行き着く先は一体どこなのだろう。

白み始めた空と、輝きを失い始めた月に、一筋の祈りを託した。

ルイという男（１）

結局私は茶会のほとんどを茂みの中で過ごした。

別に親しい誰かがいる訳でもないし、エリーゼの行方を捜すのもまた次の機会にすれば良い事だと思って。

リーディアと肩を並べて、膝を抱えて語り合ったあの時間は、色々な意味で有意義だったと思う。

今まで知り得なかったドールの実態や苦しみ、そして喜びを少しは知る事が出来たから。

帰りがけにデューンやレイフィール、それにロイズハルトとカルデイナに出くわしたが、私はあえていつも以上に機嫌良く振舞っておいた。

カルデイナには一言、別の言葉も付け加えておいたが。その言葉が効いたのか、翌日からあの不審な箱はぱったり届かなくなった。

代わりに随分と悪い風評が広まってしまったが、まあいい。開けないと中身の分からないプレゼントに比べたら何倍もマシだ。

「ねえねえ、エル。男好きってホント？ 聖職者でも男と寝るの？」
「……私のどこを見てそう思うワケ？」

あつという間に城内に広まった私の噂に真っ先に食いついてきたのは、意外にもレイフィールだった。

適当に話を聞き流しているだけでもすごいセリフを次から次へと吐くものだから、私もすっかり呆れてしまう。

けれど無邪気で愛くるしいほどの笑顔を振り撒かれては、それでもまあ良いか、と思ってしまう私もどうかと思うが。

「でもさー、僕のドール達は意外とエルのこと好きみたいだよ?」

「いいよ、そんな気遣いしなくて」

「いやホントに! まあロイズのドールと仲良くないからかもしれないけどさ」

「ドール同士でも対立してるの?」

それの方が意外だと言わんばかりに問い返すと、レイフィールは何の躊躇いもなくコクリと頷いた。

「ロイズのドールって威張ってるんだよね!」

物凄く大きな声を張り上げるレイフィールに、周りの視線が集中する。

彼が好きだというこの庭園に咲く薔薇は、今が一番綺麗に花開いていて、日暮れと同時に城内からたくさんの人が花を愛でに降りて来るのだ。

今も数人のドールと思われる女性がそこにいるのに、レイフィールは構わず不満をぶちまけるものだから一緒にいるこっちが焦ってしまった。

けれど話を聞いていた誰もがくすくすと笑って、中にはレイフィールに賛同する者までいた。

何だ、この展開は。

私は思わず狼狽する。

が、ふと思った。

これってもしかして……?

「全部アンタのドール?」

「うん、そうだよ?」

大きく頷くレイフィールは楽しそうにあっけらかんと言っ

だが、私は間抜けに口を開けたまま周囲を改めて見回してしまった。
ざっと見ただけでも十人近くはいるんじゃないだろうか。
けれどこれで全員なのかというと、少し疑問が残る。

「ねえ……アンタだけでもドールって何人いるの？」

一夫一妻が主流の人間からすれば、誰もが不思議に、そして興味深く思うことだろうけど。

「僕？　僕は少ないよ。二十人くらいかなあ」

何の躊躇いもなくそう言っただけのレイフィールの言葉に、激しい眩暈を覚えた。

「に……二十人って」

「少ないでしょ？　他のみんなは三丁四十人くらい普通だよ？」

開いた口が塞がらないというのは、まさにこの事だろうか。
一人のヴァンパイアに対して……四十人とは。

「ど……どうなってんの？　アンタ達……」

声が震えるのだって仕方ないだろう？

人間、しかも聖職者の私から見れば正直言っただけの事実だ。
想像すら難しい。

先日、デューンに対してエロだのバカだの散々喚いたけれど、あの言葉はデューンには相応しくなかったのかもしれないと思っ
た。

それに、彼にしてみれば本意なものだったのかも、と。
だって彼はドールを持つてはいないのだから。

この事実を知ってしまった今、どう見ても、誰が見ても、デューンが一番健全であることは火を見るよりも明らか。
今度会ったら一応謝っておこうか。

「でもさあ、エル達とはやっぱり文化も風習も全然違うんだね。ドールの数なんかで驚いちゃったりして、なんか可愛い」
「か……かかか？」

何を言い出すのかと思いきや、目の前の小悪魔は私を更に混乱させる気だろうか？

「僕のドールの数で驚いてたら、ルイのドールなんか見た日には気絶だね！」

レイフィールはそう言っ、周りを取り囲むドール達と無邪気に笑いあつた。

その一方で、一人眉をひそめる私。

「ん？ ルイって誰？」

突然出てきた聞き慣れない名前に首を傾げると、談笑を続けるレイフィールの代わりに、彼のドールの一人がすつと口を開いた。

「ルイ様はシードの一人ですね。エルフェリス様はまだお会いになつた事はなくて？」

「うん、知らない。初めて聞いたもん」

「まあ、それは惜しいことを……。ルイ様は大変お美しい方ですよ。レイ様には申し訳ないのですが、私達も思わずうつとりしてしまいますの」

彼女はそう言うと、夜空と同じ濃紺の扇をさつと広げ、にこやかに微笑んだ。

「そんなに綺麗な人なんだ。女のシードは死に絶えたって噂聞いたけど、まだいるんだね」

ホツとしたようなそうでないような。

何ともいえない感情が何ともいえない表情を作っていたと思う。けれどレイフィールのドールは僅かに目を伏せると、ちらりと己が主を一瞥して、それからゆっくりと首を振った。

「いいえエルフェリス様。あなた方の思う通り、女性のシードはもう既に死滅しました。……数年前の事です」
「そう、シードはもう僕達男四人だけ。……僕達で終わり」

いつの間にドール達との会話を終えたのか、レイフィールが寂しそうにそう呟いた。

「ごめん……」

あまりに悲愴な顔をする彼に、私は触れてはいけない話題に触れてしまったのだと後悔した。

共存を掲げておきながら、彼らを滅亡へ追いやる一因を担ったのは、紛れも無く人間なのだ。

ヴァンパイアハンター達の愚かな乱獲がそうさせた。

もう本当にシードヴァンパイアは絶滅への道を歩むしかなかったのだと思うと、私は何故だか胸が痛んだ。

人間にとってそれは歓喜すべき事なのかもしれないが、シードの面々を知ってしまった私は正直どう反応すべきなのか分からない。

シードが滅ぶ時。

それはすなわち、ロイズハルトやデューン、レイフィール、それにルイという男の死を意味しているのだから。

いつかデストロイが言っていた“人間が人間として生きられる時代”を人々は歓迎するだろう。

私だってどこかでそう思っている。

けれど、別に彼らシードの死を望んでいるわけではない。

——彼らは私に微笑みかけてくれるから。

それにシードがいなくなった後の世界は、或いは今よりもなお悪化するかもしれない。

枷の外れたハイブリッドが、そのまま大人しくなるとは思えないから。

「そんな難しい顔しないで？　僕たちは死んだりしないよ。……しばらくはね」

レイフィールはそう言うと、にっこりと微笑んで自身が育てた白い薔薇に手を伸ばした。

「死ねないよ。今のままじゃ」

そしてそう呟いたのだった。

ルイという男（2）

僅かに冷たい風が、白で埋め尽くされた庭園を吹き抜ける。

「そついやさ！ もしロイズのドールで困ってる事があるならルイに相談してみなよ！」

「え？　なんで？」

唐突に話題を変えたレイフィールに少し驚きつつも問い返す。

「ルイはさあ、ロイズよりも歳くってるから立場的にはロイズより上なんだよね。だからドール達もルイや、ルイのドールには逆らえないんだ。ルイを味方にすればロイズのドールも大人しくなるんじゃないかな」

腕組みをして、さも名案だと言わんばかりに頷くレイフィール。簡単には言うけれど。

「だから私はそのルイって人とは面識ないんだって」

初対面で、しかも人間。

そんな小娘を、実質シードのトップであるルイという男が相手にしてくれるとは思えない。

けれどレイフィールはそれでもニコニコと笑みを漏らす。

「大丈夫だよ。ルイは優しいから。……基本的に」

……うん？

最後に付け加えられた一言に妙な疑問を感じた。
基本的に？

基本的に、って……。

もし基本に当てはまらなかった場合はどうなるのだろう。

「別に困ってるわけじゃないんだけどなあ」

思わぬ気遣いを受けて、何だか心がむず痒い。
けれどもしもの為に、ルイの事は覚えておこう。
そう思った。

「僕のドールだってみんな困ってるんだもん。こういう時くらい役に立ってもらわないとね」

まだ見ぬ男・ルイに対して、レイフィールはそう感想を漏らした。
その発言に彼のドールも一斉に同意する。

「ロイズ様は良い方ですが……ドールの方々は何故か……ねえ」

先ほどのドールも言葉を選びながらもそう苦言する。

「確かに……うん。ロイズの趣味ってちょっと変わってる気はする
なあ」

つられて私も本音をポロリと零してしまった。
確かにそう。

ロイズハルトは聡明な感じがするのに、彼のドールはどこか思考が幼くて……そして心が歪んでしまっている。

直接手を汚さずに、じわりじわりと嫌がらせを繰り返すところとか。

すべてはロイズハルトへの愛の裏返しなのだろうが。
私には理解できない。

「でしょ？ ロイズってさあ、来る者拒まずなんだよね。誰かを好きになったところなんて見たことないし、冷たい男だよ。悪い男だから気をつけな！」

「う……うん」

まさかレイフィールの口からそのような台詞が出て来るとは夢にも思わず、私は彼の忠告に思わず苦笑してしまった。

冷たい男、悪い男か。

ふと三者会議の折にロイズハルトが見せた笑顔が、脳裏をよぎっていた。

「……」

何故だろう。

ロイズハルトの事を想うと、息が苦しくなる。

私はどこか壊れてしまったのだろうかと思うほどに。

リーディアの話を聞いていた時も、カルディナといった時も、……

そしてたった今も。

心臓が痛くて、人知れず右腕で自分の身を掻き抱いていた。

すると突然、隣に腰掛けていたレイフィールが私の肩にもたれ掛かってきた。

「どうしたの？」

慌てて顔を覗き込むと、熱っぽい眼差しで私を見上げるレイフィールと目が合った。

アイスブルーの瞳が、すぐそばで揺らめいている。

その呼吸は僅かに乱れていた。

「レイ……?」

もう一度名を呼ぼうとするよりも前に、レイフィールの手が私の手をギュッと握り締めた。

再び彼と目が合う。

「?」

突然にどうしたのだろうと狼狽していると、ふいにレイフィールのもう片方の腕が私の背に回った。

「ねえ、エル……。僕貧血になっちゃった。血……恵んで?」

妙に色っぽい瞳と吐息が頬を掠め、私は思わず固まってしまった。その隙にレイフィールの唇から覗いた舌が、私の首筋をペロリと舐める。

生温く湿った感触に、身体がゾクリと反応した。

「ややややめてよ! 血ならドールにもらえば良いじゃん!」

急回転を始めた思考が煩いほどに警鐘を鳴らす。

私は精一杯の力を込めてレイフィールを引き剥がそうとしたが、意外にも彼の力は強くて、気が付くとレイフィールの腕の中にすっぽりと抱き込まれる形になっていた。

がっちりと二の腕と肩を固定されて、身動きが取れない。

「ちょっと嘘でしょ……? やめてよ……」

「ダメ。エルって白魔法使いなんでしょ? シールド以外のヴァン

パイアを焼き尽くすって言われるその血……味見させて？」

震える私の懇願も、くすくすと笑みを漏らすレイフィールには届かなかった。

無情ともいえる彼の舌が再び首筋を這う。

ぞわぞわと全身がわなないた。

止められない。

「可愛い……怖いのか？ 大丈夫、ちょっとだけだから……」

私を墮落させる悪魔のように、レイフィールは耳元で囁いた。

けれど何とか彼の手から逃れようと全身に力を入れ、助けを求めて周囲を見回した。

そして、絶望する。

「……うそ」

先ほどまでいたレイフィールのドール達が一人残らず消えていた。呆然と呟いた私の肩口から、小さな笑い声が響いてくる。

その声が……忌々しい。

「僕のドールって気が利くでしょ？ 邪魔者は誰もいないよ」

ふいに顔を上げたレイフィールの口元から、赤い舌と白い牙が覗いていた。

——ッ！？

その瞬間。

脳裏に何かの映像が浮かび上がって、消えた。

一度だけ大きくうねった心臓が、たった一瞬の残像が、——私を狂わせる。

「やめて!!」

「エル？」

何が何だかわからなくなった。

けれどガタガタと震える身体を止められない。

吸い込む事も、吐き出す事も忘れた唇からは、声にならない声が虚しく零れ落ちて行く。

そんな私の変化に気が付いたのか、レイフィールの顔色がみるみるうちに蒼ざめていった。

「ごめんエル！ 冗談だから落ち着いて！」

泣きそうな顔をしたレイフィールが震える私の身体を強く抱き締める。

それでも震えは止まらない。

何故だか解らない。

あの残像が何なのか解らない。

ただ、赤い舌と白い牙に、私は狂うほどの恐怖を感じた。

「エル……！」

何故なの？

何で涙が溢れるの？

私はどうしてしまったの？

この城に來ると決めた時から、こんな状況は幾らでも想像していた。

幾らでも覚悟していた。

それなのに何で？

——コノ残像八何？

「ごめんね？ ごめんエルフェリス！ ……ごめんよ」

必死の眼差しで、レイフィールは私を抱きながら謝り続けた。

「泣かないで？」

少し震えが治まってきても、レイフィールは私を離そうとはしなかった。

時折背中を擦っては、私が落ち着くまですっと。

「ごめんね、エル。 ……もうしないから ……嫌いにならないで」

ようやく落ち着きを取り戻した頃、レイフィールは私の肩に顔を埋めて泣きそうな声で何度も何度もそう言った。

「うん、大丈夫。 もう大丈夫だよ。ごめんね」

私もそんなレイフィールの肩をポンポンと叩きながら、表情を崩して詫びる。

本当は恐ろしかった。

ヴァンパイアの顔をしたレイフィールが。
ヴァンパイアが。

そんな彼を私の全てが拒絶していた。

けれど私が本当に恐れたのはレイフィール自身じゃない。

私の中にある“何か”を恐れたのだ。

「大丈夫。気にしなくて良いよ」

しばらく経ってから、私はゆっくりとレイフィールの腕から離れた。

「うん……。こんなところデューンに見られたらまた怒られちゃうな」

目を少し赤くしたレイフィールも、ようやく安堵したのか眉尻を下げてくすくすと笑った。

いつも通りに。
けれど……。

「見てたけどね……ずーっと」

レイフィールの背後からゆらりと大きな図体が姿を現わすと、彼はさっと顔色を変えた。

「うわ！ デューンッ！！」

その姿を認めるや否や逃走を図ろうとするレイフィールの首根っこを、大きな手がむんずと掴む。

その顔にはハッキリとした青筋。

頑丈に握り締めた拳がゆっくりとレイフィールの頭上に振り上げられた。

「レイてめえ……発情してんじゃねえよッ！！ このクソガキッ！」

容赦ない一撃がレイフィールの脳天に振り下ろされる。

思わず目を塞いでしまうほど鈍い音が、誰もいない庭園に響き渡った。

一瞬の沈黙。

そして大地に向けてゆっくりと傾くレイフィールの体。

私は両手で口元を覆い、その情景を息を吞んで見つめていた。

「……いつてえなあ」

苦痛に顔を歪めて、遙か頭上のデューンを睨み付けるレイフィールに、デューンは至極非情で冷めた笑顔を向けた。

「こんな真似……誰が許すかよ」

二人を交互に見つめながら私はただ、黙って立ち尽くすしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3834w/>

残 -ZAN-

2011年11月13日21時29分発行